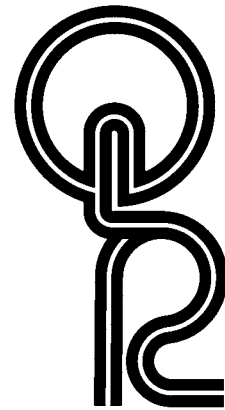


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 19 No.5, 2012



2012年大会の巡検にて、秩父盆地の尾田薪礫層を覆う中期更新世のテフラ層を前に活発な議論を交わす参加者。背後には武甲山が聳える。(撮影：吉田英嗣)

Vol. 19 No. 5

October 1, 2012

2012年大会案内・・・・・・・・・・	2	教育・アウトリーチ・・・・・・・・	15
新名誉会員紹介・・・・・・・・・・	3	ネオテクトニクス委員会野外集会	15
学会賞・学術賞報告・・・・・・・・	4	第6回幹事会議事録・・・・・・・・	16
論文賞・奨励賞報告・・・・・・・・	8	幹事会議事録・・・・・・・・・・	17
大会シンポジウム・講演会・・・・	10	評議員会議事録・・・・・・・・・・	17
巡検報告・・・・・・・・・・	11	総会議事録・・・・・・・・・・	31
普及活動・研究委員会報告・・・・	12	会員消息・・・・・・・・・・	31
INQUA2015通信・・・・・・・・・・	13	銚子巡検・防災セミナー・・・・	32
INQUA大会巡検コース公募・・・・	15		

◆日本第四紀学会 2012 年大会報告

日本第四紀学会 2012 年大会「熱い討論 第四紀学会 2012 年大会 in 立正大熊谷（立正大学開校 140 周年記念）」が、8月20日(月)～8月22日(水)の3日間にわたって、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県熊谷市）において開催されました。

今大会では発表を複数のセッションで行うことを試み、従来のような第四紀のさまざまなテーマを扱う「一般セッション」と、熊谷大会で設定した「テフラと年代測定」に関連する「テーマセッション」（日本火山学会、日本鉱物科学会、日本地質学連合、日本地質学会と共催）が、20日と21日の2日間にわたってすすめられました。一般セッションは口頭21件、ポスター36件、テーマセッションは5つのサブセッションに分けられ、口頭52件、ポスター12件の発表がありました。また、22日は国立極地研究所のご協力により、公開シンポジウム「氷床コア等から得られる第四紀環境情報」および市民・児童生徒向けの普及活動（展示・質問コーナー・南極との中継）が行われました（詳しくは本号シンポジウム報告、および普及活動報告をご覧ください）。

大会参加者数は、20・21日の研究発表では、会員172名、共催学会会員12名、非会員87名の合計271名、22日の公開シンポジウム・普及活動の参加者は、会員36名、一般（大人）104名、高校生0名、中学生2名、小学生10名、幼児3名の合計155名でした。また、会場では有料の企業展示が行われ、7企業の出展がありました。

一般セッションおよびテーマセッションでは、昨年を引き続き若手・学生会員を対象とした発表賞が企画され、口頭発表については、会長から推薦された約10名の正会員による審査・投票、ポスターについては、大会参加者全員による投票が行われ、結果は懇親会で発表されました（下記）。口頭発表の審査とコメントをお引き受けいただいた、奥野 充、小野 昭、片岡香子、鷹澤好博、北田奈緒子、（久保純子）、須貝俊彦、鈴木毅彦、早田 勉、竹村恵二、谷 篤史、田村俊和、中里祐臣、兵頭政幸、真野勝友、山田和芳の各会員にはこの場を借りてお礼申し上げます。

20日の夜に評議員会、21日の午前には総会が開催され、それぞれ2011年度の事業・決算・会計監査、各種委員会・各研究委員会等の報告と、2012年度事業計画・予算案の決定等の審議が行われ、原案が承認されました。また、名誉会員の評議員会出席に関する会則の一部改正、名誉会員の決定と役員の補充等が総会で承認されました（詳しくは本号評議員会・総会議事録をご覧ください）。総会終了後、新名誉会員4名、学会賞2件・学術賞2件・論文賞1件・奨励賞1件の表彰式と、20年以上にわたりお世話になった綿引裕子編集書記退任あいさつと原田仁美新編集書記の紹介がありました。

21日の夕方には、立正大学熊谷キャンパスステラ食堂にて懇親会が開かれました。参加者は約100名でした。大会実行委員会の田村俊和副委員長（立正大）の司会で、立正大学の米林 伸地球環境科学部長（会員）と遠藤会長の挨拶、菊地隆男新名誉会員による乾杯から始まり、歓談、新名誉会員、各種受賞者の挨拶、若手発表賞受賞者の発表・表彰、新旧編集書記、立正大学元学長吉田榮夫会員、来年度大会開催校の弘前大学の小岩直人会員（実行委員長檜垣会員代理）挨拶、大会実行委員およびスタッフ紹介、そして福岡孝昭実行委員長挨拶で締めくくられました。

若手・学生発表賞は、口頭発表賞（一般セッション学生部門：石川 智さん、一般セッション若手部門：北場育子さん、テーマセッション学生部門：中村淳路さん、テーマセッション若手部門：石村大輔さん・オブラクタ スティーブンさん）、ポスター発表賞（学生部門：長谷川 航さん・安藤広一さん、若手部門：大石雅之さん・近藤玲介さん）の計9名が授賞され、賞状と副賞の第四紀学会特製園山俊二イラスト入りマグカップが贈呈されました。

8月23日は「荒川上・中流域の第四紀」のバス巡検が実施され（案内者 田村俊和、井上素子、楡井 尊、鈴木毅彦、杉内由佳）、25名が参加しました（詳しくは本号巡検報告をご覧ください）

このほか、大会と平行して7月14日（土）～9月2日（日）まで、埼玉県立川の博物館（埼玉県寄居町）では日本第四紀学会後援で特別展「今だって氷河時代—埼玉からさぐる気候変動—」が開催され、8月19日に関連講演会（日本第四紀学会共催）として、福井幸太郎会員（立山カルデラ砂防博物館）による講演会「現存する日本の氷河 北アルプス立山連峰」が行われました（詳しくは本号講演会報告をご覧ください）。

大会中の熊谷市は連日最高気温が35℃を越える猛暑日が続く、文字通り「暑い熊谷」で「熱い討論」が行われました（会場内は空調が効いて快適でした）。共催団体各位ならびに発表・討論、講演いただいた皆様に感謝します。

最後になりますが、福岡孝昭委員長、田村俊和副委員長、北沢俊幸事務局長、青木かおり会員（以上立正大学）、早田 勉会員（火山灰考古学研究所）、楡井 尊会員・井上素子会員（埼玉県立自然の博物館）、杉内由佳氏（埼玉県立川の博物館）の実行委員の皆様、立正大学の学生・院生の運営スタッフの皆様には大会運営でたいへんお世話になりました。また、立正大学からは資金補助をはじめ、参加者へのバッグ、ペットボトル等の配布、食堂の営業のほか、大学スタッフによるさまざまなご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

（幹事 出穂雅美・久保純子）

◆新名誉会員の紹介

名誉会員候補者選考委員会（田村俊和委員長、小池裕子、斎藤文紀、辻 誠一郎、山崎晴雄各委員）により、名誉会員候補者の検討がなされました。選考委員会では、日本第四紀学会会則および名誉会員選考規程に基づき、年齢・会員歴が基準に該当する会員のうち学会役員歴、学会賞・学術賞等の受賞経験等がある者を対象に、第四紀学および日本第四紀学会への貢献等について慎重に審議し、4 会員を名誉会員候補者として推薦理由と共に答申しました。5 月 25 日の評議員会において審議され、4 名の会員を名誉会員最終候補者とすることが決定され、8 月 21 日の総会にて決議されました。

●名誉会員 大場忠道氏

推薦理由：大場忠道会員（1941 年生）は、1982 年以來の日本第四紀学会会員で、海底コア中の有孔虫化石等を用いた酸素・炭素同位体比測定に、日本では最も早い時期から取り組んできました。1980 年代初めからの日本海の海底コアの研究をはじめ、三十数回にわたる航海で得られた膨大な海底コアを解析する学際的総合研究を、多くの研究者とともに強力に推進しました。その研究は、日本列島を取り巻く海洋環境を高分解能で解析するグループ研究の成果として結実し、IMAGES プロジェクトなどに大きく貢献しました。また金沢大学と北海道大学において、酸素・炭素・窒素安定同位体による古海洋研究をめざす研究者の育成に尽力されました。このような努力で構築された研究ネットワークの活躍は、2001 年に札幌で開催された国際古海洋学会を成功に導く原動力となりました。日本第四紀学会では、1987 年より現在まで通算 11 期評議員に選出され、また本学会編『第四紀試料分析法』の編集委員長として刊行に尽力されるなど、地球化学分野のみならず第四紀学全般の発展・向上に寄与されました。これらの第四紀学への貢献により、2008 年に学会賞「海底コア中の有孔虫化石の酸素・炭素同位体比を駆使した第四紀古海洋環境に関する一連の研究」が授与されております。

以上のように、大場忠道会員の第四紀学および日本第四紀学会に対する功績は誠に顕著であり、ここに本学会の名誉会員として推薦いたします。

●名誉会員 菊地隆男氏

推薦理由：菊地隆男会員（1938 年生）は、日本第四紀学会発足期以來の会員で、主として第四紀地質層序・古生態、海水準変動、地形発達史などの研究分野で活躍してきました。とくに、関東平野、房総半島および南関東における第四紀層序や海水準変化と地形発達との関係の解明などを精力的に進め、その成果は、多くの学術論文だけでなく、地質調査所（現産業技術総合研究所地質調査総合センター）発行の 5 万分の 1 地質図幅「横浜」、同「東京西南部」、10 万分の 1 特殊地質図「東京湾とその周辺地域の地質」などに結実しています。さらに、隆起の激しい房総半島で MIS3 の海成段丘を確認

し、当時の海水準高度を推定するなど、日本の第四紀研究の発展に貢献する顕著な成果を上げています。東京都立大学と立正大学で長く第四紀に関する研究・教育にたずさわり、多くの後進を育てると同時に、各地の研究者を広く含むグループが地道に進める研究に積極的に関わり、地域的な第四紀研究の推進に尽力されました。日本第四紀学会においては、1971 年より 2008 年まで通算 16 期評議員に選出され、この間、幹事長を 1985 年から 86 年まで、庶務幹事を 1971 年から 74 年まで、編集幹事を 1979 年より 92 年までの間 4 期 8 年にわたって務めるなど、学会の運営・発展と学会誌の向上に尽力されました。これらの功績から、2011 年に功労賞を受賞されました。

以上のように、菊地隆男会員の第四紀学および日本第四紀学会に対する功績は誠に顕著であり、ここに本学会の名誉会員として推薦いたします。

●名誉会員 成瀬 洋氏

推薦理由：成瀬 洋会員（1924 年生）は、日本第四紀学会の創設時以來の会員であり、日本における本格的な第四紀研究の草創期から、その重要な一翼を担ってきました。房総半島における完新世の旧汀線高度から地殻変動と海水準変動を識別した先駆的な研究、東京湾臨海平野における沖積層の層序と海水準変動との関係を明らかにした研究、さらに関東や信州のテフラ層序、北陸地域の第四系などの総合研究や、日本列島の隆起沈降量図を作成した第四紀地殻変動研究などに参加してきました。これらの成果は学術論文や専門書だけでなく、解説書を通して広く社会に公表されています。とりわけ成瀬会員個人の執筆による『第四紀』（1982 年、岩波書店）は、国際的な視野の下で幅広い第四紀学の体系を示した名著であり、1980 年代から 1990 年代にかけてわが国第四紀学の発展と普及に大きく貢献した重要な著作となっています。日本第四紀学会においては、評議員を学会の初期の頃から 9 期（1959～1987 年：合計で 20 年）務め、学会の発展にも大きく貢献されました。これらの功績により、「日本における第四紀学発展への顕著な貢献」で 2011 年に学会賞、また同年に功労賞を受賞されております。

以上のように、成瀬 洋会員の第四紀学および日本第四紀学会に対する功績は誠に顕著であり、ここに本会の名誉会員として推薦いたします。

●名誉会員 真野勝友氏

推薦理由：真野勝友会員（1939 年生）は、日本第四紀学会発足期以來の会員で、主として第四紀古生物学および理科教育の領域で多くの研究成果を上げてきました。とくに軟体動物化石相（貝類群集）の解析研究、軟体動物化石の微細構造にもとづく系統関係と続成的変化・化石化の研究は、新生代古生物学の新たな方法の開発と領域開拓を導き、多数の論文によってその普及にも貢献してきました。また、電子顕微鏡を用いた微細構造の

研究はナウマンゾウなど哺乳類にも及び、骨や歯の解剖学的な研究が系統関係や化石化の解明に有効なことを示しました。理科教育では、水を中心とした理科総合学習カリキュラム作成など、新しい学習方法の開発に取り組んできました。こうした古生物学的研究と理科教育における学習方法の開発は、堀田 進氏や井尻正二氏との共著書『大むかしの動物』（1972年、学習研究社）、『恐竜の足あと』（1990年、築地書館）、『「新」文明のなかの未開—レリックの世界』（1998年、築地書館）に結実し、古生物学や理科への関心を促してきま

した。日本第四紀学会においては、通算9期にわたって評議員を務め、1985年～1988年および1997年～2000年の計4期にわたり幹事、その後半の2期では幹事長を務められました。さらに引き続いて2001年～2006年の3期にわたり副会長を歴任されました。このように長きにわたって要職を務められ、学会の発展に寄与されました。以上のように、真野勝友会員の第四紀学および日本第四紀学会に対する功績は誠に顕著であり、ここに本会の名誉会員として推薦いたします。

◆学会賞・学術賞受賞者選考報告

(学会賞受賞者選考委員会委員長：鈴木毅彦、幹事会)

(1) 選考経過

本年度の学会賞等の候補者の推薦・立候補は1月31日をもって締め切れ、それまでに学術賞に3名、学会賞に2名の候補者が推薦され、学会賞受賞者選考委員会（鈴木毅彦委員長、菊地隆男、佐藤宏之、松浦秀治、百原 新委員）にて検討された。選考委員会では推薦のあった候補者について日本第四紀学会学会賞規定、同内規に基づき、推薦文書および幹事会が収集した業績目録や学会活動等に関する資料を参照して審議を行った。なお、選考に当たり、学会賞は第四紀学会正会員としての「学術的な業績」・「第四紀学に貢献した活動」・「学会に貢献した活動」を選考基準とし、学術賞は日本第四紀学会正会員としての「学術的な業績」を選考基準とした。電子メール上での意見交換および4月20日の選考委員会で受賞候補者を決定した。その後、5月25日に行われた評議員会において、下記の通り受賞者が決定された。

(2) 受賞者

●学会賞

受賞者名：中村俊夫

受賞件名：「放射性炭素年代測定の高度化と普及への顕著な貢献」

受賞理由：中村俊夫会員は、計8期16年にわたり評議員を務められ、この間2期4年間幹事を担当し、50周年記念事業実行委員会委員や高精度年代測定研究委員会委員長等を歴任されてきた。放射性炭素年代測定は、微量の試料による測定を可能とした加速器質量分析の導入によって、過去5万年の第四紀における最も重要な年代測定法になったことは疑いない。その結果、古環境、古気候、人類、地形、地震・津波、火山、災害・防災等の自然科学のみならず、考古・歴史といった人文科学にまで及ぶきわめて広範囲の諸分野において基幹となる年代が、同手法により決められるようになった。中村会員は、同手法が我が国に導入されて以降、その高度化に努め、様々な分野への同手法の適用に率先して貢献されてきた。また放射性炭素年代から暦年代への較正法に関する研究においても、先導的な業績を挙げられている。その活動は、140編にのぼる学術論文や8編の著書

等で逐次公表されており、*Radiocarbon* や *Nucl. Instrum. Method B* 等の国際学術誌だけではなく、『考古学のための年代測定学』（共著、1999年、古今書院）、『日本先史時代の¹⁴C年代』（編著、2000年、日本第四紀学会）、『環境考古学マニュアル』（共著、2003年、同成社）等の数多くの普及書への寄稿もある。これらの研究活動は、我が国における高精度年代測定の確立と普及に多大な貢献をなし、特に人文科学分野に年代という基礎的尺度をもたらすことによって、第四紀学の基盤をより発展させたことは特筆できる。

以上のように、日本の第四紀学と本会の発展に多大な貢献をなしてきた中村会員の功績は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉>

このたびは学会賞を授与いただき大変光栄に存じます。受賞理由である加速器質量分析による放射性炭素(¹⁴C)年代測定研究に約30年間脇目も振らず携わってまいりましたが、その間に支援し、また利用して頂いた研究者の方々に深く感謝いたします。



中村俊夫氏

1980年に、理学博士を取得した高エネルギー物理学の分野から加速器を用いる年代測定の分野に転向しました。加速器の組み立て、¹⁴Cの検出、¹⁴Cの定量、¹⁴C年代の算出と、物理学から見ても面白いことばかりで、夢中で研究に没頭することができました。やがて¹⁴C年代測定が軌道に乗ると、試料調製に関わる化学、環境¹⁴C濃度変動を応用する地球化学、¹⁴C年代を様々な試料に応用する地質学・第四紀学の勉強が必要不可欠になり、40の手習いを始めました。自分自身が測定した¹⁴C年代(濃度)の意味がわからないとつまらないからです。また、¹⁴C年代(濃度)の意味を理解するためにも、できる限り時間を作って試料採取の現場にお伴させて頂きました。理解の悪い生徒をフィールド調査に快く誘って頂き、現場で路頭や試料を見ながら説明し、指導して頂いた研究者の皆様に深く感謝する次第です。

¹⁴C測定は従来、放射能測定法で行われていまし

た。加速器質量分析法の開発によって質的な変化があったことはご存知の通りです。加速器質量分析法の大きな特徴を二つあげますと、一つは測定に必要な試料の量です。加速器で直接分析する炭素の量は1mgですみます。米粒一つで数回繰り返し測定できます。炭素量が不足してこれまで測定できなかった試料が可能になりました。このことにより、研究対象が大きく拡大しメリットを受けた研究者は多いはずです。他の一つは、測定可能な古い年代の限界です。木曾川泥流がほぼ49,850±420BP、東京軽石流堆積物がほぼ52,310±360BPと得られました。これらの年代は¹⁴C年代測定の限界に近く、問題があるかもしれません。この測定値を他の測定法の結果と比較するためには暦年換算が必要ですが、最新のIntCal09校正データを用いてもこれらの¹⁴C年代を暦年へ換算することはできません。

¹⁴C年代測定のもう一つの質的な変化は、うえに述べた暦年への換算です。第四紀学会歴博大会で「2000年佐倉宣言」が行われ、堆積物などの編年を¹⁴C年代値ではなく、¹⁴C年代を換算した暦年代で行うことを宣言したわけです。東北大震災のあと過去の津波・地震の解明、周期解析が活発に進められていますが、そこでは、津波試料を測定した¹⁴C年代ではなく、それを換算した暦年が用いられます。正しい年代解析に近づくための理にかなった方法であり、今後の編年研究がスムーズに進むことを期待します。

このように¹⁴C年代測定の質的な発展期にたまたま遭遇して¹⁴C年代測定法の研究に専念することができ、大変幸せであったと感謝しております。現在では、加速器質量分析計はほぼ世界の主要国に設置され貴重な年代を量産しています。本邦では、8施設が稼働しており、うち2施設は企業であるように、大きな発展を遂げています。今後、ますますの発展を祈念致します。

●学会賞

受賞者名：河村善也

受賞件名：「東アジアから日本列島における古脊椎動物の時空分布に関する研究」

受賞理由：河村善也会員は、日本列島の現在の動物相がどのような過程を経て現在のようになったのかを、東アジアから日本各地の現地調査を基に、体系的にとりまとめられた。これまでの東アジアの動物化石研究は大型脊椎動物に限られていたが、小型哺乳類の系統進化に着目して小動物の時空分布の研究を押し進め、大陸との陸橋問題に関しての大きな成果を引き出された。その過程で中国の研究者との共同研究を推進し、日本の第四紀古生物学だけではなく、東アジアの生物地理学研究的発展に貢献された。また、洞窟内堆積物の発掘調査を精力的に行い、洞窟内堆積物の層序学的調査法の確立や堆積物の篩分けによる動物化石の採取方法の確立といった、これまでの動物化石研究よりも詳細な、生物化石群集の時空分布の解明に寄与する大きな成果をあげられた。

これらの研究成果は、第四紀研究の論文や多くの著書にまとめられ、特に第四紀学に関する出版物では、東京大学出版会刊の『日本第四紀地図』（共著、1987年）、『第四紀試料分析法』（共著、1993年）、『地球史が語る近未来の環境』（共著、2007年）のほか、『第四紀学』（共著、2003年、朝倉書店）などの著書を通じて、第四紀古生物学の普及に大きく貢献された。日本第四紀学会の評議員を長年勤められ、幹事としても貢献されたほか、日本第四紀学会50周年記念事業では日本各地の博物館において第四紀の特別展を中心となって推進された。

以上のように、日本の第四紀学と本会の発展に多大な貢献をなしてきた河村会員の功績は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉>

国内外を問わず野外調査などで動き回ることが好きな私は、学生から「自分たちより元気だ」とよく言われるので、若い若いとばかり思い込んでいましたが、いつの間にか還暦の年になってしまいました。私の人生で記念すべきこの年に、日本第四紀学会の学会賞という最高の賞をいただけたことを大変光栄に思っています。

私の専門分野は脊椎動物の古生物学で、特に第四紀の哺乳類化石を中心に研究を行ってまいりました。以前から、一部で「モラル・ハザード（倫理崩壊）」が起こっているこの分野で、研究者としての良識を持ち、自分の研究姿勢を貫いて、40年近くもめげることなく地道にコツコツと研究を続けてこられたことは、単に私の努力だけによるものではなく、多くの方々の支えがあったからだと思います。特に私の分野の周辺におられた他分野の方々からは、教えられたり、助けていただいたりすることが多かったように思います。今回、さまざまな分野の方が会員となっておられる日本第四紀学会から賞をいただけたことは、私の研究全般に対して多くの分野の方々から客観的な評価をいただいた結果だと思い、私自身とてもうれしく思っています。

紙面の都合もあって、そう多くのことを書くことはできませんが、これまでの研究生活を振り返って心に残っていることを思いつくままに書いてみたいと思います。私の研究の出発点は、京都・奈良の府県境に広がる奈良丘陵の大阪層群の層序研究ですが、この研究で得た知識や経験が後の私の研究に大いに役立ったと思っています。物欲に駆られて、ただ見栄えの良い化石を独占することばかりを考える骨董品屋的な発想ではなく、たとえ目立たなくとも、時間はかかっても、化石研究を行う際にはその根元に地道な層序研究がなくてはならないという考えが根付いたのも、このような研究を行ったからだと思います。

その後、私の研究の中心は日本各地の洞窟・裂罅堆積物から産出する第四紀哺乳類化石へと移っ



河村善也氏

て行きました。そのような堆積物からは、大型のものから小型のものまで実に多くの種類の哺乳類化石が産出しますので、それらを研究することで、特定の種類だけを見るのではなく、多くの種類の哺乳類を見る目が養われ、実物に即して動物群を把握できるようになったと思っています。それらの哺乳類の中で、詳細な系統分類学的研究を行う対象を小型哺乳類と決めて、齧歯類のモノグラフを完成させ博士論文にしましたが、それを恩師で本学会の会長も務められた亀井節夫先生にお願いして出版してもらいました。亀井先生からは第四紀の哺乳類について、特に動物相の変遷や生層序について多くのことを学びましたが、今から思えばあのように大部な英文のモノグラフ (Part 1 と Part 2 を合わせて 553 ページ) をよくも出版してくれたものだと亀井先生には、ただただ感謝するばかりです。この時にやり残した小型哺乳類の残りのグループ (「食虫類」と翼手類、兔類) についての系統分類学的研究は、まだ未完成です。その後、各地の第四紀層から産出する中・大型哺乳類 (イノシシ類、シカ類、ゾウ類など) の研究も行いましたが、その際には兄弟子にあたる樽野博幸さんにいろいろなことを教えていただき、この年になってまだまだお世話になっています。

私が化石そのものの研究を行う際に特に重要と考えたことは、世界的・国際的な視野を持つということで、特に日本のものを研究するには中国の化石や現生哺乳類についての知識が必要で、それらとの直接比較も必要だということです。幸いアフリカで 2 回長期に滞在する機会があり、イギリス人研究者から現地の化石研究の方法を学んだこと、当時の文部省在外研究員の制度を利用して、ヨーロッパ諸国とアメリカの博物館や大学など多くの研究機関で研究が行えたこと、それから中国には 20 数回渡航して研究を行ったことなどが、私の研究に幅と奥行きを与えてくれたと思っています。これらの国のほか、韓国や台湾、インドネシアでも化石研究を行いました。現地には行っていませんが、ロシアの化石の研究も行いました。

これらの国の中で特に重要と考えた中国については、中国人研究者 3 人の日本留学の際の研究指導を行いました。その期間は合わせて 10 年以上に及びました。2009 年に本学会の奨励賞を受賞した張穎奇さんは、そのうちの一人です。中国側では私の研究業績とそのような中国人研究者への教育貢献を評価してくれて、中国の脊椎動物化石研究の中心的研究機関である中国科学院古脊椎動物古人類研究所で、客員教授に任命してくれました。そのようなことから、中国での研究は現在、非常に円滑に進めることができるようになっていきます。

さまざまな地道な研究活動の結果得られた多くのデータをもとに、いろいろなことを考えて論文にまとめました。日本列島の第四紀哺乳動物相の変遷史と第四紀哺乳類の生層序をまとめたこと、津軽海峡氷橋説を考えたこと、日本列島への哺乳類の移動と陸橋形成についてまとめたこと、第四紀後期における哺乳類の絶滅現象についてまとめ

たことなどです。いろいろな成り行きで、現在は沖縄、特に南琉球の第四紀後期の哺乳類化石の研究と、沖縄と地理的に近い台湾の第四紀哺乳類化石の研究にかなりの精力を使っています。

以上にこれまでの研究活動についての話を書きましたが、いま研究にあてられる時間は、次第に少なくなりつつあります。還暦の年を迎え定年も間近になると、いつの間にか自分の属している大学のユニットで最年長になってしまい、年長だからという理由で大学の管理・運営にかかわる「重たい仕事」をやらざるを得ない状況になっています。また 40 年近くにわたって集めた膨大な量の標本も定年までに整理して保管してもらえるところに移管できるようにしておかないと、定年後に「ゴミ」として捨てられる恐れがあるので、昨年あたりから定年後を見据えて「身辺整理」を始めました。通常の教育研究に加えてこのような仕事をやっているため、時間的余裕がなく学会活動に積極的にかかわることができませんが、今回の受賞を励みに第四紀の哺乳類化石の研究は何とか続けていきたいと思っています。また「第四紀の哺乳類は面白い」ということを多くの一般の人々に知ってもらえるような活動も行いたいと思っています。「モラル・ハザード」とは無縁で、私のような研究をやってくれる人が少しでも増えることを願う今日この頃です。

●学術賞

受賞者名：兵頭政幸

受賞件名：「古地磁気層序の高度化と古環境・人類学への貢献」

受賞理由：兵頭政幸会員は、これまで長年にわたり、古地磁気学的手法を駆使し、内外において第四紀の古地磁気層序に関わる問題にとり組まれてきた。古地磁気層序学は第四紀の諸現象の年代を決定する上で重要な役割を担い、陸成・海成堆積物から火山岩にかけての幅広い試料を年代決定の対象とするため、第四紀学の根幹をなす主要な分野の一つといえる。なかでも第四紀の前期と中期の区分において、古地磁気層序は年代決定においてその最も重要な役割を担っているといっても過言ではない。兵頭会員は、前期と中期を境するブリュンヌ・松山境界を、中国の黄土、インドネシアのサンギラドーム、日本の大阪層群において詳細に研究され、より高分解能の古地磁気層序からその境界部の特徴を明らかにするとともに (たとえば Hyodo *et al.*, 2006, *J. Geophys. Res.*, 111)、それらを用いて、ジャワ原人 (*Homo erectus*) の年代を決める重要な結果を得た (Hyodo *et al.*, 2011, *Proc. Nat. Acad. Sci.*, 108)。これらの活動や業績は、東アジアから東南アジアの第四紀学における多大な貢献である。

また、兵頭会員は、古地磁気に関する解説として『沿岸域保全のための海の環境科学』(共著、1984 年、恒星社厚生閣)、『考古学と自然科学第 4 巻 年代測定学・地球科学』(共著、1999 年、同成社)、『デジタルブック最新第四紀学』(共著、2009 年、

日本第四紀学会)などを執筆してきた。最近では第四紀のはじまりに関する重要な解説も行っており(兵頭ほか、2012、地質学雑誌、118)、この点も大いに評価されて然るべきである。

以上のように、日本の第四紀学に多大な貢献をなしてきた兵頭会員の業績は、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉>

このたびの受賞を大変光栄に思います。私が第四紀学研究を始めたきっかけは、渡辺直径先生に声をかけていただきインドネシアの第四紀地質研究所に勤めたことです。日本の援助でつくられたばかりの同研究所に、私は1986年から1988年まで古地磁気学研究の基盤強化のため滞在しました。その間渡辺先生と午前中2時間ほど雑談するのが日課で、それは私にとって人類学、第四紀学の最先端の知識を吸収できる有意義な時間でした。その雑談と現地調査を通して先生から教わった人類学が私の第四紀研究のモチベーションの源になっています。



兵頭政幸氏

1986年9月に西ジャワ州バンドン市にある研究所に赴任すると、まだホテル住まいのまま妻をバンドンに残して出張したと記憶しているので、次の週には中部ジャワのサンギランへ調査に出かけたと思います。これが私の人生初の第四紀のフィールド体験でした。タロイモ畑に石ころのようにころがる哺乳類化石をみて興奮したのを今でも覚えています。古地磁気層序研究はサンギランに続き東部ジャワのモジョケルトでも行い、最古のジャワ原人化石産出層がハラミヨ開始期(1.07 Myr)に対比できることを示しました。しかし、1994年にアメリカのグループが $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ 年代法を用いて私の古地磁気層序年代より0.6~0.8 Myrも古い年代を発表し、ヒト科ホモ属が原人へ進化する前にアフリカを出た可能性を示唆しました。この年代は、それまでヨーロッパや日本の科学者たちが築き上げてきたジャワ原人の年代観を真っ向から否定する衝撃的なものでした。その後2000年に別のグループがこれらの年代を否定しつつもやはり古い $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ 年代値を発表しています。これらの年代測定には再堆積軽石が使われており、古い年代値はそれが原因と考える人は少なくないのですが、いまだに見直されていません。私は当時、古地磁気だけで信頼度の高い磁気層序編年ができないかと考え、これが古地磁気層序の高度化の発想の原点になります。

私は磁気層序研究においても、それまでの永年変化研究と同様に一層準4-5個の試料から高精度の古地磁気方位データを出すことを心がけました。松浦秀治さんが呼びかけて再開した2000年以降の研究でも同じです。この方法は時間がかかります。2004年にサンギランで新しい露頭を見つけ毎年サンプリングしましたが、地磁気逆転トランジションのデータが揃ったのは2007年です。その間、神戸大学の大学院生たちの頑張りで大阪湾

堆積物や中国黄土から気候層序とともにブリュンヌ・松山(B-M)トランジションの百年スケールの特徴を見出すことに成功しています。この特徴とサンギランの逆転トランジションの特徴が一致することからサンギランにおけるB-M境界を確定することができました。また、サンギランにおける原人の最終出現は約0.79 Myr前と見積もり、層序的にも0.79 Myr前の天体衝突イベントに極めて近いことを示しました。この結果は $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ 年代の見直しを強くせまるものです。トランジションの特徴を磁気層序に使うのはこれが初めてです。今後、トランジションと気候層序を組み合わせた方法を試したいと考えています。

2000年以降、毎年のようにジャワのソロ市に集合し共に調査してきた松浦秀治さん、近藤 恵さん、熊井久雄先生、Azizさん、故Sudijonoさん、Iwanさん、2002年に参加された壇原 徹さん、2005年から加わった竹下欣宏さん、神戸大学の大学院生の人たちに感謝します。このたびの受賞はこの人たちとの共同研究なしではありえません。

●学術賞

受賞者名：成瀬敏郎

受賞件名：「風成堆積物の体系的研究と第四紀古気候への貢献」

受賞理由：成瀬敏郎会員は、広島大学大学院院生時代に「出雲平野の沖積層と砂丘の発達」をテーマとして研究を始めて以来、一貫して、海岸砂丘の形成と砂丘砂の供給、風成砂・風成塵の特性、風成塵からみた最終氷期の古環境変遷、などの研究を精力的に行い、研究成果を「第四紀研究」誌等に公表されてきた。例えば、西日本の海岸砂丘堆積物中に、大陸から運ばれたレスが含まれていることを初めて明らかにし(Naruse *et al.*, 1986、第四紀研究、24)、この研究を総括した「日本海沿岸の土壌および古土壌中に堆積したアジア大陸起源の広域風成塵」(井上・成瀬、1990、第四紀研究、29)、更にこれらの風成塵の起源について、新しい手法を導入した「電子スピン共鳴法(ESR)による中国・韓国・日本の風成塵起源石英の同定」(成瀬ほか、1996、第四紀研究、35)などを公表されてきた。更に氷期と間氷期における風成塵の変動を古気候とリンクさせた研究(Ono and Naruse, 1997, *Quaternary International*, 37)と、年を追って研究テーマを発展させてきた。さらに、成瀬会員は、砂丘地形と風成堆積物、堆積物中に発見された風成塵の起原、更に古気候変遷の復元と、独自の視点と手法によりこの分野を切り拓き、これらを取りまとめた、優れた普及書である『風成塵とレス』(2006年、朝倉書店)、『世界の黄砂・風成塵』(2011年、築地書館)などを出版されている。

以上のように、日本の第四紀学に多大な貢献をなしてきた成瀬会員の業績は、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

＜受賞者の言葉＞

25年間、勤務した兵庫教育大学を定年退職して5年目を迎え、郷里の出雲市で元気に過ごしています。このたび日本第四紀学会から学術賞を授与いただき、大変光栄に存じております。



成瀬敏郎氏

風成塵の研究は、開学して間もない兵庫教育大学に1981年4月に着任して、直ちに始めました。それまで私は九州から東北にかけての日本海側に分布する古砂丘の形成史を研究していました。古砂丘には複数枚のシルト質細粒層が挟まれており、この細粒層の成因について火山灰や砂丘砂などの風化説、あるいは古砂丘砂がレスと同義という考えがありましたが、私は大陸から飛来した風成塵が累積したレスだろうと考えていました。

風成塵起源であることを証明するには土壤化学的な分析が必要ですが、学会で偶然出会った岩手大学の故井上克弘先生がそれを引き受けてくださり、私が層序的な分析を担当し、共同で研究を開始しました。風成塵の研究を進めていくうちに、氷河末端や砂漠から舞い上がった細粒な風成塵が

当時の強い風によって世界各地に運ばれ、地表に堆積して土壌の母材になっただけでなく、風成塵が気候変動や古風系復元の指標になることや、風成塵が気候変動の引き金になる可能性を秘めていることなどがつぎつぎに明らかになりました。

その過程で、さらに風成塵の給源を明らかにする必要に迫られたので、ESR分析を試みることになり、この分析が専門である大阪大学の故池谷元何先生や岡山理科大学の豊田新先生などと共同で研究を進め、同方法で風成塵の給源を解明できる可能性を見いだしました。その後も土壌学を専門とする福井県立大学の北川靖夫先生たちとも日本各地の土壌に含まれる微細石英の給源について研究を進めました。

当時の兵庫教育大学は研究設備が十分ではありませんでしたが、常に多くの共同研究者やゼミ生に恵まれ、自分でも不思議なくらい順調に研究を進めることができ、充実した研究生活を過ごすことができました。今回の受賞はその良き思い出の縁になると思います。

最後になりましたが、これまでお世話になった多くの方々から感謝の意を表したいと思います。

◆論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告

(論文賞受賞者選考委員会委員長：藤原 治、幹事会)

(1) 選考経過

会員からの推薦は2012年1月31日に締め切られたが、論文賞と奨励賞の推薦は無かった。論文賞選考委員会(藤原 治委員長、齋藤めぐみ、佐瀬 隆、豊田 新、米延仁志各委員)では、委員会内で出された候補論文について選考を進めた。選考は日本第四紀学会「論文賞と奨励賞選考に関する内規」に基づき下記の手順で行った。なお、本年度の該当論文は全体で48編であり、うち奨励賞該当は10編である。1)各賞候補となる論文の推薦(3/8～4/25)。2)各賞候補の取りまとめ。論文賞候補4編、奨励賞候補3編を選出。委員へ投票依頼(4/26)。3)投票結果取りまとめ(5/9)。論文賞1編、奨励賞1編の推薦を決定。論文賞については、独創性・総合性・発展性を重視し、奨励賞については独創性と将来性を特に重視した。最終候補者・候補論文に対して5月25日に行われた評議員会において審議され、下記の通り受賞者・受賞論文が決定された。

(2) 受賞者・受賞論文

●論文賞

受賞者名：小川明日香・栗田寛子・鷹澤好博
 受賞論文：論説 小川明日香・栗田寛子・鷹澤好博(2011) 赤色熱ルミネッセンス(RTL)および恒温加熱赤色熱ルミネッセンス(IRTL)法による十和田八戸火砕流の単粒子石英年代測定 50巻4号、169-180ページ

受賞理由：日本列島では多数のテフラが分布し、

地層や地形の編年・対比に強力な手段となっているが、未だ正確な年代が未確定なテフラも少なくない。対象論文は、この問題解決への貢献が評価された。著者らは新しい測定手法(単粒子石英のIRTL法)を、技術的な問題を克服して開発・実現しつつあり、日本のみならず国外のテフラを使った研究分野にも貢献が期待される。

年代測定は第四紀学の研究において必須の技術であるが、対象試料によって様々な方法が試みられ、精度や信頼性の向上が図られつつある。その中でも、本論文では石英単粒子の年代測定法として熱ルミネッセンス法の改良について述べている。石英の赤色熱ルミネッセンス(RTL)を使った年代測定の利点は、石英が火山噴出物に普遍的に含まれる鉱物であることと、年代測定の範囲が2kaから1.2Maにわたる広い地質時代をカバーできる点である。著者らはこの利点に注目し、測定のための技術開発を含めた研究を続けてきた。

本論文では赤色熱ルミネッセンス法に関して2つの点で改良結果が述べられている。一つは石英単粒子による測定で、これは火山噴出物に混入している外来粒子を避けるためである。もう一つは恒温加熱型のRTL測定法(IRTL)で、ヒーターのバックグラウンド(黒体放射)を低減できるなど、RTL発光の微弱な試料や若い年代の試料への応用が考えられている。具体的な測定例として十和田八戸火砕流をとり上げ、独自に改良された手法による測定(新たな光電子倍增管によるRTL検出感度の向上、黒雲母シールドによる黒体放射の抑制、SAR法による蓄積線量評価の改良)を実施した。

その結果は、同火砕流に含まれる炭化物の ^{14}C 年代測定結果とも調和的な値であり、IRTL 法として従来に勝る測定精度と確度を得ている。

著者らの研究は、年代測定の精度・信頼性を向上させ、今後の展開によっては地層の年代測定に強力なツールを提供することが期待される。よって日本第四紀学会論文賞に値すると判断する。

<受賞者の言葉>



栗田寛子氏



鷹澤好博氏

このたびは名誉ある日本第四紀学会論文賞を賜り、大変光栄に存じます。

1970年代、熱ルミネッセンス (TL) 年代測定が日本で始められて以来、更新世の年代測定法の一手法として認知され、またその成果が期待されてきました。20世紀後半から強い関心が寄せられるようになった現代の地球環境の変化が、更新世の自然の持つ環境変化に人間の環境へのインパクトがどのように連動するかを明らかにするためにも、年代測定研究への精密さの要求が高まっています。ルミネッセンス研究の分野は21世紀に入ると一挙に進み、原理的、方法的研究が発展し、世界的には光ルミネッセンス (OSL) による堆積物を中心とした研究が日進月歩で展開されています。こうした新展開に対応した年代測定が必要となっています。

一方、この研究には高価なしかも精密な TL/OSL 年代測定装置が必要なため、研究を開始するには高いハードルがあります。私 (鷹澤) がこの研究を始めようとした時、恩師の新潟大学名誉教授、橋本哲夫先生が、日本は科学技術立国なのだから日本の機器を利用して測定装置を作りなさいと諭されました。幾つかの会社を渡り歩いてようやく、研究目的を理解し、赤字も厭わず支えてくれるメデック K.K. の漆崎照政社長と巡り会えたのです。灯台下暗し、地元函館の会社でした。改善を重ね、ようやくたどり着いた装置で、今回の第四紀学会論文賞を受賞させていただいたのは、地元函館のおかげと言っても過言ではありません。

日本には更新世に記載されているテフラは500以上もあり、年代がわかっているのは主に後期更新世のテフラだけであり、中期や前期になると混沌としているという状況です。TL や OSL は原理的に見て、また、手法の安定さから見て、こうした年代への時間軸を与えることのできる有力な手法です。しかし、測定法の問題点や限界を厳密に評価しないで、単に、レシピに従った測定法では、年代数字だけが漂流することになりかねません。

受賞させていただいた2人の学生たちも今は教職にありますが、卒業論文を通して経験した、科学的な物の見方や考え方が教員生活で生きている

ようです。また、この分野は最近になって、若い研究者が増えつつあります。当たり前に海外に出て研究動向を自然に受け入れ、それぞれの研究スタイルを築きつつあります。今回の受賞は私達だけでなく、この分野に携わる方々への励みになるものと思います。最後に、私達の研究を支えてくださっている方々、学会賞に推薦していただいた委員会の皆様、そして、第四紀学会に感謝申し上げます。

●奨励賞

受賞者名：石村大輔

対象論文：論説 石村大輔 (2010) 関ヶ原周辺における段丘編年と活断層の活動性 49巻5号、255-270 ページ

受賞理由：石村大輔会員は、近畿地方中・北部の関ヶ原周辺を対象とした変動地形と活断層の研究において、多くの基礎的なデータを丹念に積み上げ、単著で論文化した点が高く評価された。関ヶ原周辺を含む近畿三角地帯は、古くから断層活動に伴う山地などの形成や、活断層の変位パターンおよび活動性などについての研究が多くあり、日本のネオテクトニクス研究の発展において重要な位置を占めてきた。一方で、当該地域については火山灰などの年代資料に裏付けられた段丘面の編年や対比が十分ではなく、どのような活動性を持つ活断層がどこに分布しているかなどの解明が課題となっていた。そのような背景の下に著者は空中写真判読、現地調査、火山灰分析を行って関ヶ原周辺の段丘面の編年と対比を進め、それに基づいて活断層の変位速度の分布を明らかにした。

主な成果は、活断層の上下変位速度と水平変位速度の比が近畿三角地帯北東縁を通じてどう変化するかを考察したものである。それによると、南部の逆断層が卓越する地域から、北部の横ずれ変位が卓越する地域へと移行していることが明らかにされた。さらに、著者はその断層活動のパターンには日本列島の下に沈み込むフィリピン海プレート の形状や深度が関連していることも示唆している。

本論文で解析に用いた個々の手法やデータは第四紀学としてオーソドックスであるが、それゆえに著者の努力がにじみ出てくるように感じる。これらの基礎データを上手くまとめあげ、断層の変位速度を議論し、広域なテクトニクスにまで言及しているところが評価され、当人のさらなる努力と将来性が期待できる。よって日本第四紀学会奨励賞に値すると判断する。

<受賞者の言葉>

このたびは日本第四紀学会奨励賞をいただき、誠にありがとうございます。受賞の通知を受け取った際には、自分が受賞者だと理解できず、何度か読み返してしまいました。実際、2012年日本第四紀学会熊谷大会の表彰式において名前を呼ばれるまで実感がわきま



石村大輔氏

せんでした。学会会期中には、多くの先生や先輩からお祝いの言葉をいただき、嬉しさとともにこの賞の重みを感じました。

賞をいただいた論文は、私が京都大学に提出した修士論文に加筆・修正を加えたものです。本論文は、石村の単著で投稿させていただきましたが、研究を進めるにあたり、京都大学の堤 浩之先生、竹村恵二先生、立命館大学の岡田篤正先生には、現地調査から論文作成に至る研究全般にわたって終始懇切丁寧なご指導をいただきました。投稿から受理にあたっては、担当編集であった熊原康博先生には、幾度も丁寧に見ていただき、本論文は大幅に改善されました。また、編集委員のみなさまと編集書記の綿引裕子氏には、受理後の論文印刷に関して大変お世話になりました。さらに修士課程において、様々な経験をさせていただいた先生方、多くのご指導をいただいた先輩方、平日頃議論していただいた同期・後輩の学生にも、この場を借りて深く御礼申し上げます。

本論文では、段丘の形成年代および断層の活動度の多くが不明であった岐阜県西部の関ヶ原周辺を対象に変動地形学の基礎的な調査を実施しました。結果、段丘面を覆う被覆層から3つの広域テフラの降灰層準を認定し、段丘面の形成年代を推定しました。そして、それらの段丘面を変位基準とし、各活断層の変位速度を明らかにしました。考察では、沈み込むフィリピン海プレートの形状と断層活動の関係を指摘しましたが、議論すべき課題は多く残っています。また、本論文作成の過程で感じた疑問や興味が、研究のモチベーションとなっており、現在の私の研究に大きく影響しています。

今回このような身に余る賞をいただいたことは、みなさまからのもっとがんばれというお言葉だと解釈しております。今後、この賞に恥じぬよう日々研究に邁進し、よりよい研究成果をみなさまにご紹介できればと思っております。今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻の程よろしく願いいたします。

◆日本第四紀学会 2012 年大会 シンポジウム報告

2012年大会では8月22日(水)に公開シンポジウム「氷床コア等から得られる第四紀環境情報」が開催された。当日は国内で最も暑い場所と言われる熊谷の夏に相応しい暑さの中、130名(内会員約40名)を超える参加者が南北両極の氷床に関連した、冷たい(?)、しかし充実した講演に熱心に耳を傾けた。講師にはフロアからの質問に真剣にお答えいただいた。講演内容は、掘削の話に始まり、氷床に閉じ込められた空気と温室効果ガス、水の安定同位体比からの情報、氷床中のエアロゾル、過去4,000年の北半球の気温変動、氷に見られる宇宙線強度変化、氷中の花粉、氷中の火山灰・宇宙塵・隕石、と8人の講師による氷床から得られる環境情報を網羅するものであった。

なお、本シンポジウムは立正大学・埼玉県立川の博物館との共催で行われ、立正大学開校140周年記念事業からのサポートを受けた。記して感謝

申し上げます。

(立正大学 福岡孝昭)



シンポジウム会場の風景

◆日本第四紀学会 2012 年大会 特別講演会報告

2012年大会の一般セッションに先立ち、8月19日(日)に「現存する日本の氷河 北アルプス立山連峰」と題した特別講演会が行われ、福井幸太郎氏(立山カルデラ砂防博物館)にお話をいただきました。この講演は、埼玉県立川の博物館(埼玉県大里郡寄居町)で、7月14日(土)から9月2日(日)まで開催された平成24年度特別展「今だって氷河時代～埼玉からさぐる気候変動～」(後援:日本第四紀学会・国立極地研究所)の関連講演会も兼ねて、川の博物館内で行われたものです。この特別展の開催時期が2012年大会と重なり、また2012年大会の会場である立正大学熊谷キャンパスと川の博物館が近隣であることなどから、共催という形をとらせていただきました。講演会には、一般の参加者も含め84名の参加があり、



講演会場

定員 80 名の会場は満席となりました。

今年、立山連峰に複数存在する雪溪のうち 3 つの雪溪（三ノ窓雪溪、小窓雪溪、御前沢雪溪）が、立山カルデラ砂防博物館の調査により、日本で初めて現存する「氷河」であると、日本雪氷学会で認められました。講演では、まず、福井氏が立山連峰の調査をはじめたきっかけから、氷河とは何かという氷河の定義についてお話していただきました。雪溪が氷河であるための条件は、「厚い氷体をもっていること」と「氷体が流動していること」と説明があり、その条件を満たすために行っ

きた観測について詳しくお話していただきました。特に氷体の流動観測については、氷体に挿入したポールの位置を GPS で測定し、ポールの動いた量を求めたということでしたが、定点でポールの位置を撮影していた連続映像の動画も紹介され、まさに氷が動いている、氷河だということが見てとれました。

最後になりましたが、ご講演いただきました福井氏とご参加いただきましたみなさまに、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

（埼玉県立川の博物館 杉内由佳）

◆日本第四紀学会 2012 年大会巡検報告

吉田英嗣（明治大学）

日本第四紀学会 2012 年大会の巡検は「荒川上・中流域の第四紀」というテーマで、田村俊和（立正大学）、井上素子、楡井 尊（埼玉県立自然の博物館）、鈴木毅彦（首都大学東京）、杉内由佳氏（埼玉県立川の博物館）の 5 氏による案内のもと、8 月 23 日に埼玉県熊谷地方および秩父地方で実施された。

立正大学熊谷キャンパスを出発してすぐに、江南断層と周辺の地形に関する説明がなされた。江南台地の構成面のうち最高位の江南 I 面の年代については、いまなお議論の最中とのことである。荒川扇状地に孤立する中新世の地層からなる観音山を右手に、また、低水時の流路幅に比べて広大な河川敷を持つ荒川を左手に、バスは川の博物館へと向かう。その中途では、埼玉県の天然記念物である「青岩礫岩」や、玉淀大橋直下にみられる新第三系の小園層と御荷鉾緑色岩類とをわかつ立ヶ瀬断層を車窓から観察した。川の博物館では、圧巻の、荒川の源流から河口までの地形を 1000 分の 1 に縮小した立体模型である「荒川模型 173」（写真）を見学した。当日は目が眩むほどの晴天であり、川面を遠くにまみえるに過ぎなかったが、敷地面積の約半分が荒川河川区域である川の博物館では 2、3 年に 1 度は駐車場が冠水するらしい。



埼玉県立川の博物館の屋外展示「荒川模型 173」

博物館を後にした一行は、寄居町用土にみられる櫛引断層の撓曲崖に向かった。これは櫛引面を切る顕著な断層変位地形で、崖の比高は 2m 弱である。深谷断層との共役関係や最新活動時期についての説明を受けた。長瀨に向かう道中の話題は江戸時代の寛保年間の洪水についてである。長瀨町樋口の国道沿い右手には、当時の水位を示す、大きく「水」とかかれた案内板を目にすることができる。また、比較的なだらかな外秩父の山地斜面においては、地すべり地形と気温の逆転現象を利用したミカン栽培が行われていることが紹介された。

大正 13 年に国の天然記念物に指定された長瀨では「岩畳」を一望できる食堂にて昼食をとり、その後は各々河床に降りて岩畳をつくる三波川帯の結晶片岩（石墨片岩）を観察した。ここでも、荒川の大規模な出水時の水位やその際の運搬物質に関する議論が活発になされた。現在は岩畳上に少なくない数の木本が侵入しており、これは荒川上流域におけるダム建設の影響によるものという。

秩父盆地に入るやいなや、眼前には石灰岩山体の武甲山があらわれる。その異様な光景に圧倒されながら、バスは尾田薪丘陵の頂部へと向かった。ここは多摩ローム層相当層におおわれる地形面であり、秩父ミュージックパークのこもれび広場展望台に至る歩道沿いでは、風化の進んだ河成礫からなる尾田薪礫層を観察できる。展望台にて秩父盆地のパノラマビューを存分に堪能したのち、尾田薪礫層を覆う中期更新世のテフラ層を観察した。三菱マテリアル社のご好意により、参加者は各々、高さ 15m 超の大露頭を前に 1 時間半にわたる詳細な観察とサンプリングに勤しむことができた（表紙写真）。関東において秩父盆地は相対的にロームの発達が発達した地域であるとのこと、ここでみられるテフラは、周辺地域の地形編年において大変重要な素材である。

こうして、大きなトラブルもなく巡検は無事に終了した。リーダーの田村先生は「ありふれたもの」と謙遜の表現で総括されたが、多種多様な地形・地質のありさまに直接接触れることのできた一日は、若手会員を多数含む 25 名余の参加者すべてにとって有意義だったに違いない。この場を借りて、案内者および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

◆日本第四紀学会 2012 年大会 普及活動報告

(担当幹事：植木岳雪・高田将志)

2012年8月22日(水)に、文部科学省の科学研究費(研究成果公開促進費)の支援を受けて、園山俊二のまんが原画展、質問コーナー「はかせに聞こう」、南極に関する普及講演会及び南極昭和基地との中継を行った。

園山俊二のまんが原画展は、2011年に故園山俊二氏が日本第四紀学会功労賞を受賞したことを受けて開催したもので、故人の奥様の協力を得て、ギャートルズのまんがの原画10点を複製し、まんが本とともに展示した。ギャートルズのまんがは学術的な厳密性には欠ける点もあるが、氷期の自然と旧石器人の暮らしが生き生きと描かれている。故園山俊二氏とのコネクションを大切に、まんがを通して第四紀学の普及・啓発に今後とも努めて行きたいと思う。

質問コーナー「はかせに聞こう」は、石と岩、地震と活断層、埼玉の自然、天気、花と森についての6人のはかせが日頃疑問に思っていることに答えるコーナーである(写真)。はかせのやる気とは裏腹に、残念ながら20人程度の質問者しかこなかった。質問コーナーを今後も実施する場合は、参加対象、実施の時期・場所、広報のあり方を検討する必要がある、大きな課題が残された。

南極に関する普及講演会及び南極昭和基地との中継は、大会シンポジウムが学会員及び一般市民を対象とするのに対して、児童・生徒を対象として行い、小学生や一般市民を含む約100名の参加

があった。国立極地研究所の大岩根 尚氏により、南極観測隊の行き帰りから南極での観測風景まで、動画を多用して30分間の講演が行われた。次に、立正大学と南極昭和基地とを衛星中継し、現在の越冬隊員2名によって、基地の内部の様子、クイズ、南極観測の実際が紹介された。また、主に小学生から素朴な質問があり、担当隊員によって回答してもらった。最後に、南極の氷を親子で触ってもらった。講演会及び昭和基地との中継は、NHKの夜のニュースでも放映された。



小学生の質問に答えるはかせたち

◆2011年度新研究委員会活動報告

「最終氷期最盛期における北東アジアの生態系変遷と人類の応答」研究委員会(代表者：出穂雅実)

INQUAのHumans and Biosphere(HaB)コミッションにおいて採択された2012年度プロジェクトHuman Technological and Behavioral Adaptation to the Last Glacial Maximum in Northeast Asia(Project No.1206)の国内における対応委員会として、LGMにおける北東アジアの生態系変遷と人類の応答を具体的に再構成することを目的とする。この目的を達成するため、南シベリア、モンゴル東北部、および北海道の当該時期の発掘調査を実施し、遺物空間分布と石器製作技術等の考古学的分析から行動論的復元を行う。さらにこれらの考古学的分析結果を、放射性炭素年代及びテフラ編年による地質学的対比によってLGMの北東アジアの考古学・自然環境データと広く対比し、当該期の人類社会の変化プロセスと要因を明らかにすることを目標としている。

2011年度は以下の作業を行った。

- (1) 2012年度に実施する第1回会議の準備作業を行った。
- (2) 研究課題を整理するための文献調査、5年間の活動計画および実際のデータベース構築作業を首都大学東京にて行った。これらの作業は、アルバイト1名による補佐を受けて行った。

●テフラ・火山研究委員会(代表者：植木岳雪)

INQUA International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology(INTAV)の国内における対応委員会として、テフラの研究者が情報を交換し、研究を推進させることを目的とし、テフラの研究成果の電子データ化、野外巡検を伴う研究集会の開催を行うことを目標としている。2011年度は野外巡検を伴う研究集会の開催時期、開催場所を検討し、2013年3月頃に東京近郊で開催する予定とした。

●古気候変動研究委員会(代表者：公文富士夫)

INQUAにおける古気候委員会(PALCOMM)に対応する委員会として、日本および東アジアを中心とした古気候変動を解明するために活動する。具体的には、1)5万年前から現在までの気候変動の高精度解析、2)中・後期更新世の古気候情報の編年と統合、3)ヒマラヤ・チベットの隆起活動と東アジア・モンスーン変動の解明、をおもな課題とする。

2011年度は1)の課題を重点としてWSの開催を目指したが、準備不足で実現できなかった。2012年11月～12月に(日程と開催場所につい

ては関係者で調整の予定)、課題の対象を2)にまで拡大したWSを開催し、更新世後期における日本版の気候編年層序(JIS)作成のための試案を作成し、提案する計画を立てた。

●古地震・ネオテクトニクス研究委員会(代表者:藤原 治)

INQUAのTerrestrial Processes, Deposits and History (TERPRO)のFocus Area Group "Paleoseismology and Active Tectonics"の国内における対応委員会として活動している。地層や地形に残された過去の地震や津波の記録が、過去の履歴を

知り将来の災害に備えるための貴重な情報となることは、2011年東北地方太平洋沖地震以降、特に注目が集まっている。しかし、この分野の研究手法や成果を具体的な防災計画へ活用する方策などは、まだ十分に確立されていない。こうした基礎情報を社会にどう生かすかについて、関連分野の研究者にとどまらず見聞と議論を広めるため、2011年度は南海トラフ沿岸(遠州灘沿岸)での野外集会の準備を進めた。新年度に入った2012年8月13日に静岡県磐田市の元島遺跡周辺、御前崎などにおいて野外集会を開催した。

◆ INQUA 2015 名古屋大会通信 (1)

国際第四紀学連合第19回大会組織委員会

国際第四紀学連合第19回大会(2015 INQUA Congress - Nagoya)の開催まで3年を切りました。INQUA大会の日本開催は、私たちにとって百年に1回の大変貴重な機会であり、日本の第四紀および第四紀研究を世界の人たちにより理解してもらえる、また海外の最前線の研究をより身近に勉強できる、更に世界の研究者と知り合いになれる絶好の機会です。2015 INQUA大会への参加は、今後の私たちの活動や日本の第四紀研究を間違いなく大きく飛躍させてくれるものと確信しています。この貴重な機会を是非活用し、皆様の積極的な参加をお願い申し上げます。

昨年のINQUA招致に際しましては、多くの方々からご支援、ご協力、ご指導を頂きました。改めて御礼、感謝申し上げますと共に、INQUA開催に向けて、引き続きご支援を頂きますようお願い申し上げます。

2011年7月の第18回INQUA大会(ベルン)で名古屋開催が決まってから、同年8月に日本第四紀学会と日本学術会議地球惑星科学委員会INQUA分科会が合同で、2015 INQUA大会に向けての組織委員会を発足させ準備を行ってきています。名古屋大会に向けての準備状況と今後のスケジュールについて報告致します。2015 INQUA大会に向けて、ご質問、ご意見などありましたら、事務局まで連絡して頂きますようお願い致します。事務局(2015inqua-sec-ml(at)aist.go.jp)

1. 大会の概要

国際第四紀学連合第19回大会(2015 INQUA Congress - Nagoya)は、招致提案書のように、下記の内容で開催予定です。

- ・ 期日: 2015年7月27日(月)～8月2日(日)
- ・ 会場: 名古屋国際会議場 <http://www.nagoya-congress-center.jp>
- ・ テーマ: 社会のための第四紀科学「Quaternary Science for Society」を目指して下記の主テーマを設けています。

Quaternary Perspectives on Climate Change, Natural Hazards, and Civilization

・ 主要サブテーマ:

1. Quaternary science for natural hazard mitigation
 2. Understanding and quantifying past changes in the Earth to improve projections of future climate, sea-level, and environmental changes
 3. Dynamics of the human environment interaction
 4. Developing and integrating new technologies for Quaternary chronology and stratigraphy
- ・ 巡検: プレ、ポスト、中日合わせて20以上

2. 組織委員会

ベルン大会に向けての招致委員会の幹事会を中心として、8つの委員会と事務局からなる下記の体制で組織委員会を発足させ、また委員長、副委員長、及び各委員会・事務局の委員長からなる組織委員会幹事会を中心に準備を行ってしています。2011年8月以来、今までに5回の幹事会を開催してきました。各委員会のメンバーについては、今後も必要に応じて順次追加する予定です。

国際第四紀学連合第19回大会 組織委員会 (2012.8.22 現在)

委員長: 斎藤文紀

名誉委員長: 杉村 新

副委員長: 遠藤邦彦、奥村晃史

顧問：海津正倫、太田陽子、大場忠道、北里 洋、熊井久雄、佃 栄吉、中島映至、町田 洋、安成哲三

プログラム委員会：小野 昭（正）、横山祐典（副）、
INQUA の 5 つの委員会、PAGES, IPCC, 名古屋大会のサブテーマ等からの関係者で委員会を構成予定
巡検委員会：鈴木毅彦（正）、三田村宗樹（副）、堀 和明
会場委員会：中村俊夫（正）、中塚 武、鈴木康弘、齊藤 毅、森 勇一、小嶋 智、豊蔵 勇
広報委員会：兵頭政幸（正）、宮内崇裕（副）
財務委員会：松浦秀治（正）、近藤 恵（副）
招聘委員会：渡邊真紀子（正）、高岡貞夫（副）
募金委員会：竹村恵二（正）、山崎晴雄（副）、牧野内 猛、鈴木康弘、奥村晃史
出版委員会：出穂雅実（正）、田村 亨（副）、門脇誠二
事務局：吾妻 崇（正）、池原 研、植木岳雪、近藤玲介、藤原 治、田村 亨

各委員会：正：委員長、副：副委員長

3. 科学セッションと INQUA の委員会

INQUA 大会では 100 弱のセッションが設けられ、その内の 6～7 割が INQUA の委員会に関係しています。INQUA には下記の 5 つの委員会があり (<http://www.inqua.org/commissions.html>)、INQUA の大会と大会の間の 4 年間は、各委員会の International Focus Groups や Commission Projects による活動が行われています。個々の活動については、上記のウェブページをご覧ください。

Coastal and Marine Processes (CMP)
Paleoclimate (PALCOMM)
Humans and Biosphere (HaBCom)
Stratigraphy and Chronology (SACCOM)
Terrestrial Processes, Deposits and History (TERPRO)

各委員会のプロジェクト等の活動は、基本的には毎年 INQUA 本部からの公募によって（締切は通例 1 月末頃）、各委員会できりとまとめられます。大会と大会の間のこれらの活動の最終成果報告会として INQUA 大会は機能しています。INQUA から支給される各プロジェクト予算は約 3000～6000 ユーロ/年で、研究費ではなくワークショップ等の開催費用に支給されます。日本からの提案も採択されています。毎年公募がありますので、積極的な応募をお願いするとともに、これらのプロジェクトの活動や会合には是非ご参加ください。すべての活動は、上記のウェブページに掲載されています。ご質問などありましたら、上記のウェブページの担当者に連絡するか、奥村晃史 INQUA 副会長にお尋ね下さい。

4. 巡検の公募

INQUA 大会では、プレ、ポストと中日の 1 日巡検、合わせて 20 を超える巡検を予定しています。巡検は、日本の地質、地形、古生物、人類・考古遺跡等の研究成果を直接、現地で海外の研究者に説明できる絶好の機会です。また海外の研究者にとって何が理解しにくいのか、何が自分たちの常識と異なるのか、実際に見てもらい、時間をかけて聞いてもらえるチャンスです。論文だけではなかなか理解できない事も一目瞭然です。これから国際誌に投稿する場合も、またすでに印刷になった研究も、この機会を是非活用して下さい。また巡検は、海外の研究者に食事を含めて日本の文化を知ってもらえる良い機会です。巡検を通じて友人となる場合も多いでしょう。詳しくは、本号の巡検公募の案内をご覧ください。

5. 今後の予定

名古屋大会に向けてのスケジュールの概要は以下の通りです。
2012 年 9-10 月：ウェブページ公開 (INQUA、日本第四紀学会の URL とリンク)
2012 年 11-12 月以降：関連学協会・機関等への共催・後援などの依頼
2013 年 8 月：日本第四紀学会弘前大会
2013 年 11 月：セッション公募
2014 年 3 月：セッション締め切り
2014 年 7 月：登録、発表、巡検申し込み開始
2014 年 8 月：日本第四紀学会大会
2014 年 12 月末：発表申し込み締め切り
2015 INQUA 大会：2015 年 7 月 27 日～8 月 2 日

6. 連絡先

2015 INQUA 大会に向けて、ご質問、ご意見などありましたら、事務局まで連絡して頂けますようお願い致します。事務局 (2015inqua-sec-ml(at)aist.go.jp)

◆ 2015 年夏日本国内 INQUA 大会野外巡検コース公募のお知らせ

2012 年 10 月 1 日

日本第四紀学会会員 各位

国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会

2011 年 INQUA ベルン大会におきまして、2015 年夏に日本国内にて INQUA 大会を実施することが正式に決定されました。大会組織委員会として、日本国内 INQUA 大会では日本とその周辺域において多数の野外巡検コースを設定し、大会の充実を目ざしています。そこで第四紀学会会員をはじめ、関連研究分野の研究者等に対しまして、広く野外巡検コースを公募いたします。

なお、2011 年の招致活動に際しては、INVITATION パンフレットを作成し、野外巡検コース仮案として 8 件の Mid-congress One-day Field Trips (1 日巡検) と 14 件の Pre-congress and Post-congress Field Trips を内外に紹介いたしました。学会ホームページの招致提案書 (<http://staff.aist.go.jp/t-azuma/INQUA2015japanWEB.pdf>) をご覧下さい。現在これらの提案者に対して正式に野外巡検コース設定に関して打診しているところです。これに加えて是非ともあらたに INQUA 大会野外巡検コースをご提案頂くことを歓迎いたします。ご提案頂ける場合、下記項目を 2015inquasec-ml(at)aist.go.jp まで 12 月末日までにご回答下さるようお願い申し上げます。

1. 野外巡検コース案種類 (該当する方を記して下さい) :

Pre-congress and Post-congress Field Trips Mid-congress One-day Field Trips

2. タイトル (英文) :

3. 案内者名 (英文) :

4. 実施日数: 日

※なお、プレ・ポストの巡検コースであっても 1 日間でも構いません。

希望があれば下記のいずれかについて、該当する項目を示して下さい。

Pre-congress Field Trip (~ 2015 年 7 月 26 日、全コースとも 1 日間以上)

Mid-congress One-day Field Trip (2015 年 7 月 30 日、全コースとも 1 日間)

Post-congress Field Trip (2015 年 8 月 3 日～、全コースとも 1 日間以上)

今後の予定

2013 年 8 月 : 日本第四紀学会大会 (弘前大会) までにコース/参加費を確定

2014 年 4 月 : 各巡検コースの案内文書 (内容・およそのコースと日程・移動形態・参加費・最少催行人数、巡検コース紹介の写真等) の締切

2014 年 7 月 : 巡検参加の募集開始

◆教育・アウトリーチ委員会報告

(担当幹事: 植木岳雪)

- 1) 互選で川村教一会員を委員長として選出した。
- 2) 文部科学省、全国の都道府県教育委員会などに、地学教育の充実を求める働きかけを行った。
- 3) ジオパーク WG を立ち上げ、尾方隆幸会員、

目代邦康会員を世話人とし、各委員・顧問を選出した。学会としてジオパークを充実させる方法を検討し、2012 年大会でジオパークに関する発表を委員を中心として行うことにした。

◆日本第四紀学会 古地震・ネオテクトニクス研究委員会 野外集会報告

鳴橋竜太郎 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)

古地震・ネオテクトニクス研究委員会の野外集会が 2012 年 8 月 13 日 (月) に静岡県掛川市、磐田市、御前崎市周辺で開催された。今回の巡検の目的は南海トラフ東部で発生した古地震の痕跡を訪ねることである。遠州灘沿岸では、歴史地震に伴う津波や地殻変動が知られているが、その痕跡 (津波堆積物や海岸段丘) が地層や地形にどのように記録されているかは十分には分かっていない。地層から津波堆積物を識別し防災などに活用する法などを学ぶこともまた今回の巡検の大きな

テーマであった。蒸し暑いお盆休みの真ただ中にもかかわらず、総勢 27 名が参加し朝の 9 時過ぎに JR 掛川駅に集結した。講師は藤原 治 (産総研)、吾妻 崇 (産総研) の両先生である。巡検は太田川下流域から御前崎にかけ、3 地点を重点的にまわった。

1ヶ所目は磐田市豊浜の元島遺跡周辺である。当遺跡は現・太田川の右岸に位置し、弥生時代～16 世紀頃までの集落遺構などからなる。遺跡の立地する太田川低地は、縄文海進で海水準の高かつ

た頃は内湾や潟湖であったものが、後年に河川の作用で埋め立てられ形成された。中世には後背湿地環境で池・湿地・河川が複雑に分布し、内水交易の盛んな地域であった。現地には遺跡発掘時のトレンチが残り、法面では永長津波（1096年）堆積物を観察することができた。

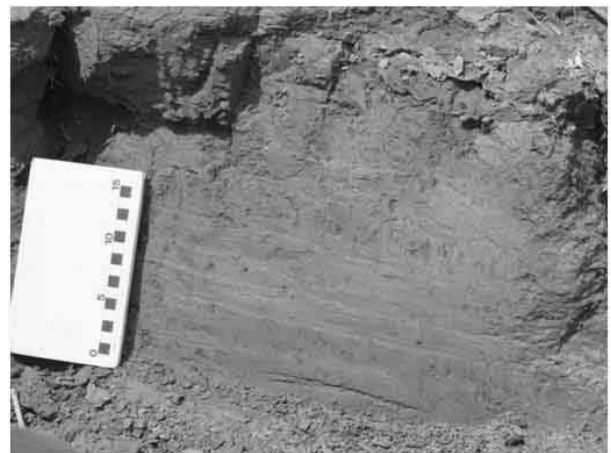
また、遺跡より500mほど上流にある河川改修工事の現場の法面では、明応津波（1498年）の堆積物が露出していた。後背湿地性のシルトが卓越する地層に津波堆積物が挟在するが、津波堆積物は未固結の砂層であるため、差別侵食により法面で水平な線状に凹んでいるため遠目でも視認しやすい。その下方の水面あたりには永長津波の層があるとのことだった。現在工事が進展している大きな法面には安全管理上の理由で近付けなかったため、川岸に露出する小規模な法面での観察だったが、それでも上述の永長のイベント層より細かな堆積構造を見ることができた。法面では極細砂とシルトのきれいな互層が見られ、フレーザー葉理を形成していた。また砂層には海→陸の流向をもつカレントリップルも見られた。ただし、すぐ近くには旧河川のチャネル跡とおぼしき砂層もあり、津波堆積物との区別の難しさを感じさせられた。津波堆積物を高潮堆積物や潮汐堆積物と弁別し、特定するには多くのデータと多角的に情報を総合する過程が必要なのだろう。津波堆積物とみなす上での重要点は、①遡上、引き波の繰り返しがあるか、②繰り返し重なる砂層の間にマッドレープ（流れの停滞を意味する）があるか、などである。

2ヶ所目は掛川市西大淵の横須賀城址周辺である。当地域は弁財天川の下流、太田川低地の南東端にあたる低湿地である。北、東には小笠山丘陵があり、南方の遠州灘沿岸には砂州・砂丘が発達する。宝永地震が起こる前までは「入江池」「内海」といった入江・潟湖が広がる地形環境であった。「とうもんの里」という道の駅で昼食休憩をとりつつ、地形観察を行った。ちなみに「とうもん（とうも）」とは漢字では「稻面」と書き、一面田んぼが広がる様子を表す言葉である。施設すぐ北側には横須賀城址と石津八幡神社を結ぶ旧砂州が東西に走り、南方1km程度には中新田の砂州が見える。田んぼ

を潟湖に置き換えれば、かつてのバリアーラゲーンシステムをイメージしやすい風景であった。

3ヶ所目は御前崎市新神子の完新世段丘を訪れた。ここでは新神子I～IV面の計4段の段丘（最高位であるI面の高度は15m弱）が確認されており、それらを歩きながら確認した。II面、III面、IV面は、およその旧海面高度が判明しており、1.5m/1000年近い隆起速度を示すが、I面は侵食などのために旧海面高度を示す地層が未確認とのことであった。これら海成段丘は、約8mm/yの大きな沈降速度をもつ非地震性地殻変動、1m程度の隆起量の短周期（約150年）地震、加えて1度に1.6-2.8m程度の海岸隆起を生じる長周期（約1500年）巨大地震、および海岸に発達する浜堤・砂丘によって形成された結果であるという。遠州灘近傍らしく段丘面の境界には砂丘が発達し、地形的興味が尽きない場所であった。参加者からも質問が相次ぎ、充実した解説・議論が行われた。最後にバスで後期更新世の御前崎段丘周辺をまわり、4時頃掛川駅で解散した。

津波堆積物、海成段丘といった海溝型地震の代表的な痕跡を2つセットで実見し、最新の研究成果を元に解説していただくという貴重な経験となった。最後に、当巡検の案内者および企画・運営に携わった関係者の方々、ならびに話題・議論を提供してくださった方々に厚く御礼申し上げます。



1498年明応地震津波の堆積物。画面左が海側。

◆ 2011年度第6回幹事会議事録

日時：2012年7月22日（日）10:00～16:00

場所：早稲田大学教育学部1029会議室

出席者：遠藤、小野、久保、池原、北村、長橋、植木、出穂、高田、須貝、水野、奥村（学術会議）、中野（事務局）

（報告事項）

- 1) 学会への連絡・寄贈・配布物：13件。
- 2) 各研究委員会の2011年度の活動報告と予算使用及び2012年度計画をとりまとめた。
- 3) 編集委員会を7月21日に開催した。第四紀研究51巻3号を刊行し、4号（2011年鳴門教育大学大会特集号）は編集作業中である。第3回評議

員会において提案された第四紀研究編集方針について議論を行った。J-STAGEによる電子ジャーナル化は、51巻2号までの公開準備が終了した。掲載論文のPDFファイルの著者への送付手順についてとりまとめた。編集書記の引き継ぎ体制と時期、および熊谷大会特集号の編集スケジュールについて確認した。

- 4) 2012年熊谷大会について、担当と内容を確認した。また総会・評議員会資料の確認を行った。
- 5) INQUA名古屋大会に向けて組織委員会を中心に準備を進め、2012年11月に第四紀学会から学術会議へ共同開催申請を行うことにした。

(審議事項)

- 1) 2012年度事業計画と予算案について議論した。予算については、デジタルブックCD300部の改訂作成費を承認し、講演会・講習会費などを削減することとした。
- 2) 名誉会員が総会のほか評議員会にも参加できるように、会則の一部改正を評議員会・総会で提

案することにした。また、学会賞・論文賞選考委員の対象幅を広げるなど選考体制に関する規定・内規を一部変更する提案を評議員会で行うことにした。

- 3) INQUA名古屋大会に向けて、地盤工学会の第10回環境地盤工学シンポジウムの共催など同学会との協力を進めることを確認した。

◆ 2012年度第1回幹事会議事録

日時：2012年8月20日(月) 12:20～13:00
 場所：立正大学熊谷キャンパスアカデミックキューブ A309 教室
 出席者：遠藤、小野、竹村、久保、池原、北村、長橋、岡崎、植木、出穂、高田、須貝、兵頭、水野、奥村(学術会議)

- 1) 評議員会・総会の内容と手順について確認した。
- 2) 2014年大会会場候補地について議論を行い、INQUA名古屋大会に向けて関連したシンポジウムを行う必要があることなどから、東京大学柏キャンパスを第1候補地として関係者と調整することとした。

◆ 2012年度第1回評議員会議事録

日時：2012年8月20日(月) 18:00～20:00
 場所：立正大学熊谷キャンパス・アカデミックキューブ A310 教室
 出席者：遠藤邦彦(会長)、吾妻 崇、池田明彦、池原 研、出穂雅実、植木岳雪、海津正倫、大場忠道、岡崎浩子、奥村晃史、小野 昭、河村善也、北村晃寿、久保純子、公文富士夫、斎藤文紀、里口保文、須貝俊彦、鈴木毅彦、竹村恵二、長橋良隆、兵頭政幸、藤原 治、水野清秀、山崎晴雄、横山祐典(以上、評議員)、高田将志(幹事)、町田 洋(前会長)
 出穂雅実行事幹事の司会で、遠藤邦彦会長あいさつの後、河村善也評議員を議長に選出した。定足数確認(出席者25名、委任状13通)後、配布資料に基づき、下記の報告・審議を行った。

- 開催した(出席者18名、委任状12通、議長：吾妻 崇)。幹事会を6回開催した。
- 3) 2012年日本第四紀学会賞および学術賞の選考を行った。
 - 4) 2012年日本第四紀学会論文賞および奨励賞の選考を行った。
 - 5) 2012年名誉会員最終候補者の選考を行った。
 - 6) 2011年度会費の減免申請(1件)に対して承認した。
 - 7) 転載許可の受付と承認(3件)を行った。
 - 8) 寄贈図書受付、整理を行った。
 - 9) 学会・シンポジウム等の共催・後援等を行った：日本地質学会大会シンポジウム「関東盆地の地殻・地質構造とその形成史」及びトピックセッション「関東平野の更新統層序とテクトニクス」(共催：2011年9月9・11日)、第55回粘土科学討論会(共催：2011年9月14～16日)、第21回環境地質学シンポジウム(共催：2012年1月24・25日)、第2回日本ジオパーク全国大会洞爺湖有珠山大会(後援：2011年9月29日～10月1日)、野尻湖発掘50周年記念式典およびシンポジウム(後援：2011年10月1・2日)、2011国際縄文フォーラム(後援：2011年10月29・30日)、千葉県立中央博物館秋の展示「砂のふしぎ」(後援：2011年10月1日～12月4日)、第1回アジア太平洋巨大地震・火山噴火リスク対策ワークショップ(後援：2012年2月22～25日)、第5回ジオパーク国際ユネスコ会議(組織委員派遣：2012年5月12～15日)、埼玉県立川の博物館平成24年度特別展「今だって氷河時代～埼玉からさぐる気候変動」(後援：2012年7月14日～9月2日)、ESR・ルミネッセンス年代測定関連国際学会(協賛：2012年11月18～22日)、国際火山学地球内部化学協会2013年学術総会(後援：2013年7月20～24日)、京都国際地理学会議(後援：2013年8月4～9日)。
 - 10) 会員名簿を編集し、出版した。

I 報告事項

1. 2011年度活動報告(2011年8月1日～2012年7月31日)

各担当幹事より活動報告がなされた。

- 1-1 庶務(庶務幹事：水野清秀[庶務]、三田村宗樹[顕彰]、北村晃寿[法務])

1) 会員動向(2012年7月31日現在)：正会員1349名(うち学生費会員72名、海外会員11名を含む)、名誉会員12名、賛助会員10社。逝去会員：宮地直道会員(2011年10月30日)、相馬秀廣会員(2012年8月11日)。

2) 総会・評議員会・幹事会の開催：2011年度第1回評議員会を2011年8月26日に鳴門教育大学で開催した(出席者23名、委任状14通。議長：鈴木毅彦)。2011年度総会を2011年8月27日に鳴門教育大学において開催した(出席者89名、委任状151通。議長：公文富士夫)。2011年度第2回評議員会を2012年1月21日に奈良女子大学において開催した(出席者17名、委任状22通、議長：藤原 治)。2011年度第3回評議員会を2012年5月25日に幕張メッセ国際会議場で

- 11) 東日本大震災にかかわる学会の取り組みをまとめ、学術会議事務局に提出した。
- 12) 2012年1月までの旧研究委員会の総括を行い、また新研究委員会(4委員会)の設置をした。

1-2 行事・企画(行事幹事:出穂雅実、企画幹事:植木岳雪、高田将志)

1) 日本第四紀学会2011年大会を鳴門教育大学(徳島県鳴門市)において、2010年8月26日(金)～8月29日(月)の4日間にわたって開催した。8月26日と27日の2日間に一般研究発表を行い、口頭50件、ポスター26件、合計76件の研究発表が行われた。また、26日に評議員会、27日に総会、学会賞等の授与式が行われた。一般研究発表では、今大会から若手・学生会員を対象とした発表賞が企画された。28日には公開シンポジウム「環太平洋の環境文明史」および普及講演会「徳島で考える地震津波と防災—東日本大震災からの新たな教訓—」が行われた。また今回は、年輪年代学のオープンラボが実施された。大会参加者数は、26・27日の一般発表では、名誉会員2名、正会員117名、正会員(学生)4名、非会員および不明34名の合計157名、28日の公開シンポジウムでは100名、普及講演会では120名であった。29日には、「百万年前の東四国を探る」と題するアウトリーチ巡検が行われ、参加者は小学生を含む56名であった。

2) 2011年度学術賞受賞者講演会を、2012年1月21日に奈良女子大学において実施、学術賞受賞者1名(前田保夫会員)による講演が行われた。また、同日引き続いて、シンポジウム「ヒトと自然の相互関係を読む:縄文時代から古代まで」を企画した。4件の講演があり、参加者は合計で約70名であった。

3) 2012年2月4日(土)～5日(日)に市民向けイベント「新たな視点で東四国の自然の価値を発見しよう」を徳島県で開催した。2月4日(土)の野外巡検には全部で16名、2月5日(日)の徳島県立博物館でのミニ講演会・サヌカイトのコンサートには100名近くの参加者があった。

4) 日本第四紀学会2012年大会の準備を行った。大会は立正大学熊谷キャンパスにおいて、8月20日(月)にテーマセッション・一般セッション・評議員会、21日(火)にテーマセッション・一般セッション・総会・懇親会、22日(水)に公開シンポジウム及び普及活動、8月23日(木)に巡検を行う予定で準備が進められている。実行委員会は、立正大学のスタッフを中心とする会員である。

5) 日本第四紀学会2013年大会開催地とシンポジウム内容について検討を行った。2013年8月に弘前大学において大会を実施することで調整中である。

6) 文部科学省から公募があった平成24年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)に応募し、採択された。

1-3 編集(編集幹事:長橋良隆・岡崎浩子)

1) 第四紀研究第50巻5号(2010年東京学芸大

学大会特集号:趣旨説明1編、総説4編、短報1編、解説1編、資料2編、書評2編、72頁)、第6号(論説2編、短報2編、書評1編、52頁)を刊行した。第50巻の総頁は330頁である(第49巻389頁)。第四紀研究第51巻1号(学会賞受賞記念論文1編、論説1編、短報1編、資料1編、書評2編、64頁)、51巻2号(学術賞受賞記念論文1編、論説3編、短報1編、書評1編、65頁)、51巻3号(学会賞受賞記念論文3編、論説1編、63頁)、51巻4号(2011年鳴門教育大学大会特集号:趣旨説明1編、総説3編、論説8編、101頁)を刊行した。なお、51巻から印刷紙が変更となった(紙代はこれまでと同額)。

2) 日本第四紀学会賞・学術賞受賞者に受賞記念論文の投稿を依頼し、2010年学会賞受賞記念論文を第51巻1号及び3号に、2010年学術賞受賞記念論文を第51巻2号に、2011年学会賞受賞記念論文を第51巻3号に掲載した。2011年学術賞受賞者には原稿投稿を依頼済みである。

3) 編集委員会は5回(2011年10月16日、12月10日、2012年2月11日、3月31日、7月21日)開催した。第1回の編集委員会(10/16)では、投稿から印刷までの編集作業の流れ、編集委員の役割等について、さらに投稿から受理までの迅速化について説明し、意見交換を行った。7月23日現在、受理済み論文は4編(総説1編、書評3編)、手持ち原稿は10編(論説6編、短報4編)である。2011年の投稿数は25編(特集号と雑録・書評を除く)であり、2010年は28編(第四紀の新定義に関する特集の7編を含む)、2009年は20編であった。

4) 投稿規定の改正に伴って、学会HP掲載文書(投稿規定、執筆要項、送り状、保証書、著作権譲渡同意書)の差し替えと「投稿規定改定に伴う補足説明」のHP新規掲載を2012年に実施した。あわせて、第四紀通信19巻1号に補足説明を掲載した。

5) 編集状況や問題点は「編集委員会だより」を通じて、会員に知らせるように努めた。原稿の投稿を「編集委員会だより」にて呼びかけた。また、2011年鳴門教育大学大会では編集委員会ブースを出し、編集活動の広報と投稿の促進を呼びかけた。編集委員会ブースは立正大学大会においても開設する。

6) J-STAGEによる電子ジャーナル化を行っている。J-STAGE側の修正作業の遅れのため公開が遅れていたが、現在のところ51巻2号まで公開している。刊行後1年以内の号についての全文閲覧は、会員のみ利用可能であり、IDとパスワードにて管理される。アブストラクトと刊行後1年以上経過した号の閲覧については、会員外も含めて利用可能である。

7) 編集書記の後任について公募を行った。1月16日締め切りで2名の応募があり、書類選考の後、1月23日に面接を行ったが、結果として該当者なしとなった。そのため、2月15日締め切りで再公募を行ったところ、4名の応募があった。書類選考後、面接を行い、原田仁美さんに決定した。

1-4 広報（広報幹事：兵頭政幸）

1) 「第四紀通信 (QR News Letter)」 Vol.18 No.5 (2011 年 10 月)、同 No.6 (2011 年 12 月)、Vol.19 No.1 (2012 年 2 月)、同 No.2 (2012 年 4 月)、同 No.3 (2012 年 6 月) および同 No.4 (2012 年 8 月) を刊行した。

2) これまで日本第四紀学会ホームページ用に使用していた国立情報学研究所のサーバ停止に伴い、2012 年 3 月から民間会社(さくらインターネット)のレンタルサーバの利用を開始した。ホームページ <http://quaternary.jp/>

3) 「第四紀通信」上記各号の電子版(pdf形式)を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。

4) 日本第四紀学会ホームページを通じて各種の広報・普及活動を行った。主なものは、「第四紀通信電子版」の掲載のほか、①本学会 2012 年大会の情報提供、②本学会主催行事(シンポジウム、講演会等)の情報提供、③「第四紀研究」の目次掲載、④地球惑星科学連合大会の情報提供、⑤各種公募・助成情報の掲載、⑥他学会等による各種イベント情報等の提供である。

5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じ、大会、講演会、シンポジウム、研究集会、公募・助成等の連絡や情報提供を行った。

6) 日本第四紀学会幹事会メーリングリストの管理を行った。

7) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストの管理を行った。

1-5 渉外（渉外幹事：須貝俊彦）

1) 公益社団法人日本地球惑星科学連合(2011 年 12 月 1 日から公益社団法人化): 2011 年 9 ~ 10 月に代議員選挙。日本第四紀学会員 12 名当選(大気水圏科学 <2012 年 5 月の代議員会にて、大気海洋・環境科学セクションから改称>、地球人間圏科学、固体地球科学、地球生命圏科学の各セクションから)。2012 年大会が 2012 年 5 月 20 日 ~ 25 日に幕張メッセで開催され、42 件の国際セッションを含む 177 件のセッション(前年比 +3) が開催され、3,876 件の発表(同 -168) と、7,318 名の参加(同 +1,524) があった。各サイエンスセクションで、学生優秀発表賞。第四紀関係のセッションは毎年充実: 第四紀学会単独開催セッション『ヒト-環境系の時系列ダイナミクス』(Oral:15+Poster:19)、共催『平野地域の第四紀層序と地質構造』(O:5+P:10)(以上、HQR 第四紀セッション)、主催『活断層・古地震』(O:19+P:36)、共催『津波堆積物』(O:14+P:21)、共催『人間環境と災害リスク』(O:15+P:15)、共催『ジオパーク』(O:9+P:17)、『磁気層序・微化石層序-高精度年代法に向けて』(O:7+P:3)、『氷床・氷河コア』(O:10+P:9)、『古気候・古海洋』(O:25+P:29)はじめ、多数のセッションが開催された。前 2 者と後 2 者は連続開催。

地球惑星科学連合 2013 年大会第四紀学会プログラム委員 2 名: 渉外幹事と吾妻 崇会員(INQUA 対応兼)が継続対応。今後のスケジュール: セッショ

ンの提案(9 ~ 10 月予定) > 提案セッションの採択(11 月予定) > 大会プログラム編成案の検討(2 ~ 3 月予定)。

地球惑星科学連合環境・災害対応委員会第四紀学会選出災害対応委員: 田力正好会員。

2) 自然史学会連合 2011 年度総会、2011 年 12 月 17 日中央大学で開催。新会長に北里 洋氏。

3) 地質の日事業推進委員会、2011 年 4 月 ~ 事務局担当産総研 今西和俊氏。2012 年登録イベント数 100 件超 (<http://www.gsj.jp/geologyday/2012/index.html>)。

4) PAGES 関係、Young Scientists Meeting 第 2 回来年 2 月にインドのゴアで開催。PAGES-J 代表中塚 武氏、PAGES-J-SSC 横山祐典氏に交代。

2. 2011 年度決算報告・会計監査報告(本号資料 1「2011 年度収支決算報告」、資料 2「貸借対照表」、資料 3「2011 年度会計監査報告」、資料 5「2011 年度業務委託費」参照)

池原 研会計幹事より配布資料に基づき説明があった。続いて大場忠道会計監査より、2011 年度の会計が適正に運用されていたことを確認した旨、報告された。

3. 研究委員会報告

水野庶務幹事より、2008 年 2 月から活動を開始した 5 つの研究委員会、“地球温暖化問題”を検討する研究委員会(代表者: 陶野郁雄)、古気候変動研究委員会(代表者: 公文富士夫)、「東アジアにおける酸素同位体ステージ 3 の環境変動と考古学」研究委員会(代表者: 小野 昭)、テフラ・火山研究委員会(代表者: 長岡信治)、古地震・ネオテクトニクス研究委員会(代表者: 吾妻 崇)は、2012 年 1 月で活動終了となり、その総括報告は、第四紀通信 Vol.19, No.2 に掲載されている旨報告された。続いて 2012 年 1 月の評議員会において承認された 4 つの新研究委員会の活動報告が各代表者によって報告された(本号「2011 年度研究委員会活動報告」参照)。

4. 学会賞・学術賞受賞者選考報告

2011 年度第 3 回評議員会(5 月 25 日)で決定した学会賞・学術賞の選考報告について、水野庶務幹事より経緯の説明が行われた(本号「学会賞・学術賞受賞者選考報告」参照)。

5. 論文賞・奨励賞受賞者選考報告

2011 年度第 3 回評議員会で決定した論文賞・奨励賞の選考報告について、水野庶務幹事より経緯の説明が行われた(本号「論文賞・奨励賞受賞者選考報告」参照)。

6. 名誉会員候補者選考報告

2011 年度第 3 回評議員会で決定した名誉会員候補者の選考経緯について、水野庶務幹事より説明が行われ、名誉会員は 2012 年度総会において決定されることが報告された(本号「新名誉会員の紹介」参照)。

7. 教育・アウトリーチ委員会報告

植木企画幹事より、資料に基づき活動報告が行われた(本号「教育・アウトリーチ委員会報告」参照)。

8. 国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会報告

斎藤文紀委員長より、資料に基づき活動報告が行われた(本号「INQUA 2015 名古屋大会通信(1)」参照)。

9. 第 22 期日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会報告

奥村晃史委員長より、資料に基づき活動報告が行われた。

10. その他

久保純子幹事長より、第 3 回評議員会で、評議員から「第四紀研究」の編集に関する提案があり、これに対し評議員会メーリングリストを通じて編集作業と日程の概要を説明し、意見聴取を行ったことが報告された。

II 審議事項

1. 2012 年度事業計画 (2012 年 8 月 1 日～2013 年 7 月 31 日)

下記の事業計画について各幹事より説明があり、承認された。

1-1 庶務

- 1) 総会・評議員会・幹事会を開催する。
- 2) 選挙管理委員会を組織し、2013～2014 年度役員選挙を実施する。
- 3) 会員名簿の管理を行う。
- 4) 学会賞・学術賞受賞者選考および論文賞・奨励賞受賞者選考に関する業務を行う。
- 5) 功労賞選考に関する業務を行う。
- 6) 転載許可・受け入れ図書等の整理を行う。
- 7) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。
- 8) 日本学術振興会賞などの賞への学会推薦を行う。
- 9) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

1-2 会計

会計に関する業務を行う。

1-3 行事・企画

- 1) 2012 年 8 月 20 日～23 日に立正大学熊谷キャンパスを会場として、日本第四紀学会 2012 年大会を実施する。
- 2) 文部科学省平成 24 年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)による学会主催の活動として、2012 年大会にあわせて 2012 年 8 月に園山俊二まんが原画展、質問コーナー「はかせに聞こう」、南極についての普及講演・昭和基地との中継を企画し、開催する。2012 年秋から冬にかけて、埼玉県の自然に関する市民向け巡検と講演会を企画し、開催する。また、平成 25 年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)に応募する。

3) 2012 年度学会賞・学術賞受賞者講演会を実施する。

4) 講習会または巡検を関東で企画し、開催する(時期は未定)。

5) 日本第四紀学会 2013 年大会を 2013 年 8 月に弘前大学で開催するため、弘前大学関係者を中心として検討し、その準備を行う。また、2014 年大会の準備を行う。

1-4 編集

1) 2012～2013 年の編集委員会を組織し、第四紀研究の編集にあたる。

2) 「第四紀研究」第 51 巻 5 号、6 号、第 52 巻 1 号、2 号、3 号、4 号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGE を通じて、電子ジャーナルとしての刊行を行う。

3) 2012 年大会特集号編集委員会を設置し、企画・編集などにあたる。

4) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。また、編集書記の交代に伴って、誌面の質を維持し、定期公刊に支障がないように引き継ぎを行う。

1-5 広報

1) 広報委員会を組織して、第四紀通信の編集およびホームページの維持管理を行う。

2) 「第四紀通信(QR News Letter)」Vol.19 No.5 (2012 年 10 月)、同 No.6 (2012 年 12 月)、Vol.20 No.1 (2013 年 2 月)、同 No.2 (2013 年 4 月)、同 No.3 (2013 年 6 月)および同 No.4 (2013 年 8 月)を発行する。

3) 「第四紀通信」上記各号の電子版(pdf 版)を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。

4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。

5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。

6) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストおよび日本第四紀学会幹事会メーリングリストの管理を行う。

7) 2015 年 INQUA 名古屋大会のホームページと連携して日本第四紀学会ホームページ英語版の充実を図る。

1-6 渉外

日本地球惑星科学連合をはじめ、自然史学会連合等国内関連学協会との連携を高めていく。とくに地球惑星科学連合における日本第四紀学会の認知度と活動度を高めるために、

1) 渉外委員会を組織し、第四紀学の幅広い分野と専門性を生かした組織としての渉外活動の展開を目指す。

2) 連合大会セッションについて、旧『第四紀』セッションを継承する『ヒト-環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層古地震』ならびに『平

野地質—第四紀層序と地質構造—』を第四紀学会が開催し、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、ジオパークをはじめ第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる（セッション提案期間は9月1日～10月中旬頃）。

1-7 国際第四紀学連合第19回大会準備

国際第四紀学連合第19回大会組織委員会を中心に、2015年7月27日～8月2日に名古屋で開催予定の第19回INQUA大会の準備を進め、2012年11月に日本第四紀学会から日本学術会議への共同開催申請を行う。

2. 2012年度予算

資料4「2012年度予算案」および資料6「2012年度業務委託費見積」に基づき、池原会計幹事から説明があり、承認された。

3. 名誉会員の評議員会出席に関する会則の一部改正

名誉会員は総会に参加し、発言できるように2010年大会において改正されたが、評議員会においても、名誉会員が参加し発言できるように、会則の一部を改正することが幹事会から提案され、承認された。総会において最終決定されることが確認された。

(現行会則)

第13条3項

会長・副会長・会長経験者および会長推薦の幹事は、評議員会に出席し、意見を述べることができる。

(改正案)

第13条3項

会長・副会長・会長経験者・名誉会員および会長推薦の幹事は、評議員会に出席し、意見を述べることができる。(下線部追加)

4. 名誉会員決定に伴う評議員及び会計監査補充

名誉会員の決定により、評議員及び会計監査に欠員が生じる場合があり、その場合には2011～2012年度役員選挙の次点者を補充するという提案が、幹事会から出され、その方針が承認された。

5. 学会賞選考委員会および論文賞選考委員会の構成変更に関する規定・内規の改正

学会賞選考委員および論文賞選考委員をより広く人選するため、下記のように日本第四紀学会学会賞規定ならびに日本第四紀学会学会賞と学術賞選考に関する内規、日本第四紀学会論文賞と奨励賞選考に関する内規の一部改正を行う提案が幹事会から出され、承認された。

1) 学会賞規定

(現行規定)

本規定は日本第四紀学会会則第3条3項に基づき、第四紀学の発展に貢献する優れた業績をあげた会

員等の表彰に係わる事項を定める。

第5条 学会賞選考委員会は、評議員の投票により選出された評議員経験が2期以上の5名の会員からなる学会賞選考委員で構成し、学会賞選考委員の互選により学会賞選考委員長をおく。学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。

第10条 論文賞選考委員会は、評議員の投票により選出された5名の論文賞選考委員で構成し、論文賞選考委員の互選により論文賞選考委員長をおく。論文賞選考委員の任期は1年とし、連続して論文賞選考委員に就任することはできない。

(改正案)

本規定は日本第四紀学会会則第3条4項に基づき、第四紀学の発展に貢献する優れた業績をあげた会員等の表彰に係わる事項を定める。(下線部に変更)

第5条 学会賞選考委員会は、評議員の投票により選出された評議員経験を有する5名の会員からなる学会賞選考委員で構成し、学会賞選考委員の互選により学会賞選考委員長をおく。学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。(下線部に変更)

第10条 論文賞選考委員会は、評議員の投票により選出された5名の会員からなる論文賞選考委員で構成し、論文賞選考委員の互選により論文賞選考委員長をおく。論文賞選考委員の任期は1年とし、連続して論文賞選考委員に就任することはできない。(下線部を追加)

2) 学会賞と学術賞選考に関する内規

(現行内規)

5. 学会賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の投票により選出される。……

(改正案)

5. 学会賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の投票により選出される。……(下線部を削除する)

3) 論文賞と奨励賞選考に関する内規

(現行内規)

4. 論文賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の投票により選出される。……

(改正案)

4. 論文賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の投票により選出される。……(下線部を削除する)

6. その他

前回の評議員会にて提案された第四紀研究の編集方針について再度議論された。他学会の編集方法が参考意見として出され、幹事会で再度検討することとした。

資料(1) 2011年度収支決算報告書 (2011年8月1日～2012年7月31日)

収入の部				(単位: 円)
科目	予算額	決算額	増減	摘要
会費収入	11,708,000	11,659,186	-48,814	
正会員会費収入	11,448,000	11,359,186	-88,814	通常会員(過年度)会費 11,107,000円(859,000円) 学生会員会費 210,000円 海外会員会費 42,186円
賛助会員会費収入	260,000	300,000	40,000	20,000円×10社(13口)
誌代	1,800,000	1,771,536	-28,464	要旨集売上(256,000円)、定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	800,000	642,711	-157,289	50巻4号～51巻3号別刷代
雑収入	200,000	517,679	317,679	2011年大会余剰金(449,787円)、JST、著作権料収入等
利子収入	5,000	9,197	4,197	普通預金、定期預金利息
広告料収入	200,000	0	-200,000	
役員選挙積立金取崩収入	0	0	0	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	1,000,000	1,000,000	0	
予備費積立金取崩収入	2,000,000	2,000,000	0	
収入合計	17,713,000	17,600,309	-112,691	
前期繰越金	6,783,907	6,783,907	0	
合計	24,496,907	24,384,216	-112,691	

支出の部				(単位: 円)
科目	予算額	決算額	増減	摘要
会誌発行費	6,440,000	5,771,436	668,564	
印刷費	3,000,000	2,631,615	368,385	50巻4号～51巻3号 各1,600部
編集費	1,500,000	1,122,874	377,126	
編集人件費	1,440,000	1,760,000	-320,000	編集書記手当(原田様4ヵ月分32万円含)
別刷印刷費	500,000	256,947	243,053	第四紀研究 50巻4号～51巻3号
会誌・会報送費	700,000	619,542	80,458	第四紀研究 50巻4号～51巻3号
会報発行費	810,000	665,140	144,860	
印刷費	600,000	494,340	105,660	第四紀通信 18巻4号～19巻3号 各1,500部
編集費	10,000	12,400	-2,400	第四紀通信編集費
編集人件費	200,000	158,400	41,600	第四紀通信編集アルバイト代
大会運営準備金	400,000	400,000	0	2012年大会用
巡検準備金	100,000	100,000	0	2012年大会用
講演会・シンポジウム費	200,000	44,820	155,180	
予稿集印刷費	500,000	178,920	321,080	2011年大会講演要旨集(本冊200部)
学会賞等顕彰費	200,000	107,470	92,530	副賞1名(50,000円)、賞状作成費
講習会費	100,000	0	100,000	
通信費	300,000	298,970	1,030	会費請求書発送郵税、事務通信費等
会議費	100,000	16,000	84,000	評議員会会議費等
旅費・交通費	400,000	585,030	-185,030	幹事会・委員会等交通費
印刷費	400,000	415,484	-15,484	学会専用封筒、総会資料印刷、コピー代
業務委託費	2,277,870	2,272,436	5,434	事務委託費概算払分
デジタルブック最新第四紀学CD出版費	0	0	0	
INQUA第19回大会準備費	2,000,000	2,000,000	0	INQUA2015組織委員会
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	0	0	
名簿作成費	1,500,000	1,204,087	295,913	名簿作成費
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	350,000	350,000	0	
名簿作成積立金繰入支出	0	0	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	0	
研究委員会助成金支出	250,000	69,300	180,700	
加盟学協会分担金支出	30,000	30,000	0	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金
雑費	100,000	32,580	67,420	振込手数料等
予備費	200,000	227,115	-27,115	INQUA招致パンフレット印刷代
支出合計	17,857,870	15,888,330	1,969,540	
次期繰越金	6,639,037	8,495,886	-1,856,849	
合計	24,496,907	24,384,216	112,691	

資料(2) 貸借対照表および財産目録

貸借対照表
(2012年7月31日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産	9,259,886	流 動 負 債	1,914,000
小 口 現 金	404,322	前 受 会 費	1,914,000
現 金 (事 務 局)	61,532		
郵 便 振 替	5,196,430	正 味 財 産	17,345,886
普 通 預 金	3,567,602	名 簿 作 成 積 立 金	0
未 収 金	30,000	INQUA 対 策 積 立 金	0
		役 員 選 挙 費 積 立 金	350,000
固 定 資 産	10,000,000	予 備 費 積 立 金	8,500,000
定 期 預 金	10,000,000	次 期 繰 越 金	8,495,886
		(前 期 繰 越 金)	6,783,907
		(当 期 収 支 差 額)	1,711,979
合 計	19,259,886	合 計	19,259,886

財 産 目 録
(2012年7月31日現在)

(単位：円)

科 目	摘 要	金 額
小 口 現 金	編集書記手許金	404,322
現 金	事務局手許金	61,532
郵 便 振 替	年会費振込専用口座	5,196,430
普 通 預 金	みずほ銀行早稲田支店	3,372,288
普 通 預 金	三井住友信託銀行本店営業部	195,314
未 収 金	広告料	30,000
流 動 資 産 合 計		9,259,886
定 期 預 金	三井住友信託銀行本店営業部	10,000,000
固 定 資 産 合 計		10,000,000
合 計		19,259,886

負 債 の 部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
前 受 会 費	2012年度以降年会費	1,914,000
合 計		1,914,000

正 味 財 産 の 部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
名 簿 作 成 積 立 金	名簿作成積立金	0
INQUA 対 策 積 立 金	INQUA対策積立金	0
役 員 選 挙 費 積 立 金	役員選挙費積立金	350,000
予 備 費 積 立 金	予備費積立金	8,500,000
次 期 繰 越 金		8,495,886
	前 期 繰 越 金	6,783,907
	当 期 収 支 差 額	1,711,979
合 計		17,345,886

資料(3) 2011年度会計監査報告

日本第四紀学会

会長 遠藤 邦彦 殿

2011年度会計監査報告書

2012年8月7日(火)、(株)春恒社 会議室において日本第四紀学会
2011年度収支決算報告書(2011年8月1日～2012年7月31日)の監
査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されてい
ることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。

以上

2012年8月7日(火)

会計監査 大場 忠道 

会計監査 百原 新 

資料(4) 2012年度予算案 (2012年8月1日～2013年7月31日)

収入の部				(単位:円)
科 目	2011年予算額	2011年決算額	2012年予算案	摘 要
会費収入	11,708,000	11,659,186	11,111,000	
正会員会費収入	11,448,000	11,359,186	10,851,000	9,000円×1,300名×90%+(学生5,000円×50名×90%)+(海外会員120,000円×80%)
賛助会員会費収入	260,000	300,000	260,000	20,000円×10社(13口)
誌代	1,800,000	1,771,536	1,800,000	Back No.,定期雑誌仕入,予稿集売上等
別刷・超過頁代収入	800,000	642,711	700,000	
雑収入	200,000	517,679	200,000	JST、著作権料収入等
利子収入	5,000	9,197	5,000	
広告料収入	200,000	0	70,000	名簿広告費
役員選挙積立金取崩収入	0	0	350,000	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	1,000,000	1,000,000	0	
予備費積立金取崩収入	2,000,000	2,000,000	0	
収入合計	17,713,000	17,600,309	14,236,000	
前期繰越金	6,783,907	6,783,907	8,495,886	※12年度前期繰越金は11年度予算より計上
合計	24,496,907	24,384,216	22,731,886	

支出の部				(単位:円)
科 目	2011年予算額	2011年決算額	2012年予算案	摘 要
会誌発行費	6,440,000	5,771,436	6,600,000	第四紀研究 51巻4号～52巻3号 計6号
会誌印刷費	3,000,000	2,631,615	3,000,000	
会誌編集費	1,500,000	1,122,874	1,500,000	
会誌編集人件費	1,440,000	1,760,000	1,600,000	編集書記手当
会誌別刷印刷費	500,000	256,947	500,000	
会誌・会報送費	700,000	619,542	700,000	第四紀研究 51巻4号～52巻3号 計6号
会報発行費	810,000	665,140	810,000	第四紀通信 19巻4号～20巻3号 計6号
会報印刷費	600,000	494,340	600,000	第四紀通信印刷費
会報編集費	10,000	12,400	10,000	第四紀通信編集費
会報編集人件費	200,000	158,400	200,000	第四紀通信編集アルバイト代
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	2013年大会用
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2013年大会用
講演会・シンポジウム	200,000	44,820	150,000	
予稿集印刷費	500,000	178,920	300,000	2012年大会講演要旨集
学会賞等顕彰費	200,000	107,470	100,000	副賞1名(50,000円)、賞状作成費
講習会費	100,000	0	50,000	
通信費	300,000	298,970	300,000	会費請求書発送郵税,事務通信費等
会議費	100,000	16,000	100,000	評議員会会議費等
旅費・交通費	400,000	585,030	500,000	幹事会等交通費
印刷費	400,000	415,484	350,000	学会専用封筒,総会資料印刷,コピー代金
業務委託費	2,277,870	2,272,436	2,267,160	
デジタルブック最新第四紀学CD出版費	0	0	800,000	デジタルブック最新第四紀学CD300枚
INQUA第19回大会準備費	2,000,000	2,000,000	0	
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	0	700,000	
名簿作成費	1,500,000	1,204,087	0	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	350,000	350,000	0	
名簿作成積立金繰入支出	0	0	300,000	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	500,000	
研究委員会助成金支出	250,000	69,300	210,000	4委員会
加盟学協会分担金支出	30,000	30,000	30,000	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金
雑費	100,000	32,580	100,000	振込手数料等
予備費	200,000	227,115	200,000	
支出合計	17,857,870	15,888,330	15,567,160	
次期繰越金	6,639,037	8,495,886	7,164,726	
合計	24,496,907	24,384,216	22,731,886	

**資料（５） 2011年度業務委託費
(2011年8月1日～2012年7月31日)**

I. 会員業務費用	<u>1,259,025</u>
1. 会員管理費	996,100 (1,423件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員)	18,000 (15件× 1,200円)
(賛助会員)	10,000 (10件× 1,000円)
3. 学会誌送信用ラベル作成・貼付・納品	203,725 (計 8,149件× 25円)
学会誌送信用ラベル出力手数料	6,000 (計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	25,200 (7箱× 3,600円)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u> ※年間
IV. 庶務業務費用	<u>24,000</u> ※事務局幹事会出席費用
V. その他	<u>91,200</u> ※別刷請求手数料他
	※マーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>108,211</u>
合 計	<u>2,272,436</u>

**資料（６） 2012年度業務委託費見積
(2012年8月1日～2013年7月31日)**

I. 会員業務費用	<u>1,239,200</u>
1. 会員管理費	980,000 (1,400件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員)	18,000 (15件× 1,200円)
(賛助会員)	10,000 (10件× 1,000円)
3. 学会誌送信用ラベル作成・貼付・納品	200,000 (計 8000件× 25円)
学会誌送信用ラベル出力手数料	6,000 (計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	25,200 (7箱× 3,600円/年)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u> ※年間
IV. 庶務業務費用	<u>30,000</u> ※事務局幹事会・評議員会出席費用
V. その他	<u>100,000</u> ※別刷請求手数料他
	※マーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>107,960</u>
合 計	<u>2,267,160</u>

資料(7) 日本第四紀学会 2011 年度行事リスト

年	月日	会場	行事種別	主催	共催	テーマ	後援
2011	8月26日 (金)	鳴門教育大 学	評議員会				
	8月26日 (金)・27 日(土)	鳴門教育大 学	大会(一般発 表)				
	8月27日 (土)	鳴門教育大 学	総会				
	8月28日 (日)	鳴門教育大 学	公開シンポジ ウム	日本第四紀 学会		環太平洋の環境文明史	
	8月28日 (日)	鳴門教育大 学	普及講演会	日本第四紀 学会		徳島で考える地震津波と 防災-東日本大震災から の新たな教訓-	
	8月29日 (月)		アウトリーチ 巡検	日本第四紀 学会		百万年前の東四国を探る	
	9月9日 (金)	茨城大学	シンポジウム	日本地質学 会	日本第四紀 学会	関東盆地の地質・地殻構造 とその形成史	
	9月11日 (日)	茨城大学	トピックセク ション	日本地質学 会	日本第四紀 学会	関東平野の更新統層序と テクトニクス	
2012	1月21日 (土)	奈良女子大 学	評議員会				
	1月21日 (土)	奈良女子大 学	学術賞授賞記 念講演会	日本第四紀 学会			
	1月21日 (土)	奈良女子大 学	シンポジウム	日本第四紀 学会		ヒトと自然の相互関係を 読む:縄文時代から古代ま で	
	2月4日 (土)		アウトリーチ 巡検	日本第四紀 学会	徳島県立博 物館	新たな視点で東四国の自 然の価値を発見しよう	
	2月5日 (日)		ミニ講演会と 石の楽器のコン サート	日本第四紀 学会	徳島県立博 物館	新たな視点で東四国の自 然の価値を発見しよう	
	5月20日 (日)~25 日(金)	幕張メッセ	日本地球惑星 科学連合 2012 年大会	日本地球惑 星科学連合			
	5月25日 (金)	幕張メッセ	評議員会				

資料(8)

日本第四紀学会 2011 ~ 2012 年度役員名簿
(ただし下線者は 2012 年 8 月 21 日 ~ 2013 年 7
月 31 日の期間)

会長: 遠藤邦彦

副会長: 小野 昭、竹村恵二

会計監査: 鈴木毅彦、百原 新

評議員 (42 名)

共通 (5 名): 奥村晃史、公文富士夫、斎藤文紀、
竹村恵二、山崎晴雄

地質学 (8 名): 池原 研、岡崎浩子、里口保文、
長橋良隆、藤原 治、水野清秀、三田村宗樹、
吉川周作

地理学 (6 名): 吾妻 崇、植木岳雪、海津正倫、
久保純子、須貝俊彦、鈴木毅彦

古生物学 (4 名): 河村善也、北村晃寿、澤井祐紀、
高橋啓一

動物学 (2 名): 池田明彦、本川雅治

植物学 (2 名): 五十嵐八枝子、百原 新

土壌学 (2 名): 三浦英樹、渡邊真紀子

人類学 (2 名): 松浦秀治、小池裕子

考古学 (4 名): 阿部祥人、出穂雅実、小野 昭、
佐藤宏之

地球物理学 (2 名): 阿部彩子、兵頭政幸

地球化学 (2 名): 中村俊夫、横山祐典

工学 (2 名): 陶野郁雄、八戸昭一

幹事 (* 印は会長推薦幹事)

池原 研、植木岳雪、岡崎浩子、久保純子、須
貝俊彦、長橋良隆、水野清秀、出穂雅実*、北村

晃寿*、高田将志*、兵頭政幸*、三田村宗樹*

資料(9)

日本第四紀学会 会則 (下線部に変更)
(1956 年 4 月 29 日, 総会にて決定)
(1995 年 8 月 26 日, 総会で一部改正)
(2002 年 8 月 24 日, 総会で一部改正)*
(2004 年 8 月 28 日, 総会で一部改正)*
(2005 年 8 月 27 日, 総会で一部改正)
(2009 年 8 月 29 日, 総会で一部改正)
(2010 年 8 月 21 日, 総会で一部改正)
(2011 年 8 月 27 日, 総会で一部改正)
(2012 年 8 月 21 日, 総会で一部改正)

注: * の行の年号が 2012 年に配布した会員名簿
では 2005 年と間違っていて記載されていました。お
詫びして訂正します。

第 1 章 総則

第 1 条

本会は日本第四紀学会 (Japan Association for
Quaternary Research) という。

第 2 条

本会は第四紀を中心とする諸問題を、関係各分野
の協力により解明し、第四紀学の進歩と普及をは
かることを目的とする。

第 3 条

本会は第 2 条の目的を達成するために下記の事
業を行なう。

1. 会誌, 第四紀通信誌, その他の出版物の発行,
電子媒体等による情報発信。

2. 学術講演会、普及講演会、談話会、講習会、野外見学会等の企画開催。
3. 研究委員会等による研究および調査の推進。
4. 研究の奨励および業績・功勞の表彰。
5. 内外の関連学協会との研究協力および連絡。
6. その他目的を達成するために必要な事業。

第4条

本会会則の変更は総会の議決によって行なう。

第2章 会員

第5条

本会は第四紀学に関心を持つ会員で組織する。会員は会誌等の配布を受け、第3条に規定した事業を享受する、あるいは事業に参加する権利を有する。また、会員は会則と倫理憲章を遵守する義務を負う。

第6条

会員は正会員、名誉会員および賛助会員の3種とする。正会員および名誉会員は第2条の目的達成に寄与する個人とし、賛助会員は第2条の目的を賛助する個人および法人とする。名誉会員は第四紀学について顕著な功績ある正会員の中から評議員会が推薦し、総会の議決によって定める。なお、名誉会員の選考規定は別に定める。

2. 会員になろうとするものは、本会会則および倫理憲章に同意の上、入会申込書を会長宛に提出しなければならない。また、本会を退会しようとする会員は、会長宛に退会届を提出することとする。

3. 1年以上、会費を滞納した会員は、評議員会の議をへて、除籍されることがある。

4. 会員が不正行為等を行った場合には、法務委員会の議により除名あるいは会員の資格停止等の処分を受けることがある。また、会員は不正行為等があったとする申し立てを行うことができる。なお、これらの細則は別に定める。

第7条

会員は総会の議決によって定められた会費を納めねばならない。会費は前納とし、年額、正会員は9000円（但し、学生・院生は5000円）、賛助会員は一口（20000円）以上とする。名誉会員は会費の納入を要しない。

2. 特別な事情がある場合、会費の減免をすることができる。

第3章 総会

第8条

総会は正会員を持って組織し、欠席した正会員の委任状を含み全正会員の10分の1以上の出席がなければ、成立しない。出席した正会員は2名以上の欠席した正会員の委任を受けることは出来ない。総会は各年度につき1回以上会長が招集し、本会の基本方針を決定する。

第9条

名誉会員は総会に参加し、意見を述べることができる。

第4章 役員および評議員会、幹事会、委員会

第10条

本会の役員は、会長1名、副会長2名、会計監査2名、評議員互選幹事7名、会長推薦幹事5名以内および役員選挙規定で定める数の評議員とする。役員の任期は2年とし、会長および副会長はそれぞれ合算して2期（4年）を超えることはできない。評議員は6期以上、会計監査は2期以上、幹事は3期以上連続して就任できない。なお、幹事の任期は合算して4期（8年）を超えることはできない。

第11条

評議員は正会員の中から互選される。ただし、会長経験者は被選挙権を有しない。会長・副会長・会計監査は正会員の中から評議員会において選出され、幹事は評議員の互選と会長の推薦による。会長推薦幹事については、正会員から選ばれ、評議員会の承認を必要とする。評議員および評議員互選幹事の任期を半年以上残した時点で欠員が生じた場合、次点者を補充することができる。

第12条

会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。また、副会長は、幹事会の役割分担の及ばない範囲に生ずる会務を行う。

第13条

評議員は評議員会を構成し会則第2条に定める本会の基本方針に基づき、本会の運営に関する案件を審議決定する。また、本会会則の施行に係わる細則（細則、規定、内規など）を決定する。

2. 評議員会は評議員の3分の1以上の出席（委任状を含む）をもって成立する。ただし出席した評議員は2名以上の欠席した評議員の委任を受けることはできない。

3. 会長・副会長・会長経験者・名誉会員および会長推薦の幹事は、評議員会に出席し、意見を述べることができる。

4. 評議員会は各年度につき2回以上会長が招集する。

第14条

幹事会は幹事により構成され、会長及び副会長とともに本会の運営に関する会合を定期的に開催する。会長は必要に応じて幹事以外の者を幹事会に出席させることができる。幹事は幹事長を互選する。幹事会は、庶務、法務、会計、編集、行事、企画、広報、渉外などの会務を執行し、各年度につき1回以上、評議員会・総会に会務の執行状況を報告し、必要な案件を提案する。

2. 幹事会は会務を執行するため、各会務に関する常設委員会を置くことができる。各常設委員会の委員は幹事会が正会員の中から選び、会長が委嘱する。会長は必要に応じて、非会員に外部委員を委嘱できる。

3. 幹事会は必要に応じ、評議員会の承認を得て期限を定めた特別委員会を置くことができる。

第15条

本会に、不正行為等の疑義のある会員に対して裁定を行う法務委員会を置く。

2. 本会に特定の研究を推進する研究委員会を置

く。

3. それぞれの細則は別に定める。

第5章 会計

第16条

本会の経費は、会費、寄付金、補助金等による。

第17条

本会の会計年度は毎年8月1日に始まり、翌年の7月31日に終わる。

第18条

本会の会計は毎年総会の前に監査を受けるものとする。

第6章 細則

第19条

本会会則の施行に関わる細則は別に定める。

付則1

本会事務局は東京都新宿区大久保2丁目4番地12号（〒169-0072）新宿ラムダックスビル10階に置く。

付則2

本会則は 2012年9月1日より施行する。

資料 (10)

日本第四紀学会 学会賞規定（下線部に変更）

（1994年8月26日，評議員会・8月27日，総会にて決定）

（1997年8月6日，総会にて一部改正）

（2006年8月4日，評議員会にて一部改正）

（2007年2月3日，評議員会にて一部改正）

（2008年8月22日，評議員会にて一部改正）

（2010年8月20日，評議員会にて一部改正）

（2012年8月20日，評議員会にて一部改正）

〔目的〕

第1条 本規定は日本第四紀学会会則第3条4項に基づき，第四紀学の発展に貢献する優れた業績をあげた会員等の表彰に係わる事項を定める。

〔賞の名称〕

第2条 本学会に，日本第四紀学会賞，日本第四紀学会学術賞，日本第四紀学会功労賞，日本第四紀学会論文賞及び日本第四紀学会奨励賞（以下「学会賞」，「学術賞」，「功労賞」，「論文賞」及び「奨励賞」と略称する）を設ける。

〔受賞の対象〕

第3条 学会賞は，第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動，及び学会活動に貢献した正会員に授与し，学会における最高の賞とする。学術賞は，第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する。功労賞は，第四紀学の発展や学会活動に貢献した個人や団体，組織に授与する。論文賞及び奨励賞は，会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した会員である著者に授与する。奨励賞は若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。

〔受賞者の選考〕

（学会賞と学術賞）

第4条 学会賞及び学術賞候補者を選考するため，学会賞受賞者選考委員会（以下「学会賞選考委員会」と略称する）をおく。

第5条 学会賞選考委員会は，評議員の投票により選出された評議員経験を有する5名の会員からなる学会賞選考委員で構成し，学会賞選考委員の互選により学会賞選考委員長をおく。学会賞選考委員の任期は1年とし，3期以上連続して就任できない。

第6条 本学会会員は，学会賞選考委員会に対して学会賞及び学術賞受賞候補者を推薦することができる。

第7条 学会賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し，受賞候補者を会長に答申する。学会賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

（功労賞）

第8条 功労賞の選考は，幹事会にて行い，評議員会に候補者を推薦する。

（論文賞と奨励賞）

第9条 論文賞及び奨励賞受賞候補者を選考するため，論文賞受賞者選考委員会（以下「論文賞選考委員会」と略称する）をおく。

第10条 論文賞選考委員会は，評議員の投票により選出された5名の会員からなる論文賞選考委員で構成し，論文賞選考委員の互選により論文賞選考委員長をおく。論文賞選考委員の任期は1年とし，連続して論文賞選考委員に就任することはできない。

第11条 本学会会員は，論文賞選考委員会に対して論文賞及び奨励賞受賞候補者を推薦することができる。

第12条 論文賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し，受賞候補者を会長に答申する。論文賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

〔受賞者の決定〕

第13条 評議員会は，学会賞選考委員会，幹事会及び論文賞選考委員会から推薦された受賞候補者をもとに，受賞者を決定する。

〔選考結果の報告〕

第14条 学会賞選考委員長，幹事長及び論文賞選考委員長は，評議員会の結果を踏まえて受賞者の選考経過と結果を総会に報告する。

〔授賞式〕

第15条 授賞式は総会にあわせて行い，学会賞，学術賞，功労賞及び論文賞受賞者へは賞状を，奨励賞受賞者へは賞状及び副賞〈賞金〉を授与する。

〔その他〕

第16条 本規定に定めるもののほか，学会賞に係わる必要事項は内規として評議員会が別に定める。

〔規定の変更〕

第17条 本規定の変更には評議員会の承認を必要とする。

〔規定の施行〕

第18条 本規定は 2012年9月1日から施行する。

資料 (11)

日本第四紀学会 学会賞と学術賞選考に関する内規
(下線部に変更)

(2007年2月3日, 評議員会にて決定)

(2008年8月22日, 評議員会にて一部改正)

(2010年8月20日, 評議員会にて一部改正)

(2012年8月20日, 評議員会にて一部改正)

1. 学会賞は, 第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与する。
2. 学術賞は, 第四紀学の発展に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する。優れた編書・著書・論文などの一連の業績を対象とする。
3. 学会賞と学術賞の授与は, 原則として毎年とし, それぞれ若干名とする。
4. 学術賞の対象成果が, 複数の著者〈研究グループ等を含む〉によりなされたものである場合には, 筆頭著者または代表者に学術賞を授与する。
5. 学会賞選考委員は, 会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の会員のなかから, 評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは, 専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は, 年長順とする。選挙の際には, 分野を考慮した選挙を行うため, 各分野からの候補者, 過去3年間の学会賞選考委員会の名簿を明示する。なお, 学会賞選考委員の任期は1年とし, 3期以上連続して就任できない。
6. 学会賞選考委員が受賞候補者となった場合には, 賞の選考に関与しないこととする。
7. 学会賞選考委員に欠員が生じた場合は, 次点者を補充する。
8. 受賞候補者の推薦書類は, 幹事会が定める期日までに日本第四紀学会学会賞選考委員会宛てに提出する。
9. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称, 推薦者名(自薦を含む), 受賞候補者名, 受賞件名及び推薦理由。
10. 会長は第四紀通信に学会賞と学術賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
11. 学会賞選考委員会は, 幹事会が定める期日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し, 会長に答申する。また, 学会賞選考委員長は, 評議員会と総会において, 選考経過と結果を報告する。
12. 学会賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と受賞理由を報告する。
13. 学会賞と学術賞の選考において, 受賞候補者が, 当該年の論文賞の受賞候補者となっても, 双方の賞の妨げとしない。
14. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。
15. 本内規は, 2012年9月1日から施行する。

資料 (12)

日本第四紀学会 論文賞と奨励賞選考に関する内規
(下線部に変更)

(1994年8月26日, 評議員会・8月27日, 総会にて決定)

(1995年1月28日, 評議員会にて一部改正)

(1997年8月6日, 総会にて一部改正)

(1999年1月30日, 評議員会にて一部改正)

(2006年8月4日, 評議員会にて一部改正)

(2007年2月3日, 評議員会にて一部改正)

(2010年8月20日, 評議員会にて一部改正)

(2012年8月20日, 評議員会にて一部改正)

1. 選考の対象は, 授与年の前々年及び前年の2年間(2巻分)の第四紀研究に発表された論説, 短報, 総説, 資料, 講座及び特集号の論文とする。奨励賞については, 選考が行われる当該年の4月1日現在で, 会員である35歳以下の筆頭著者の論文を対象とする。すでに奨励賞を受賞したことがある筆頭著者の論文は, 奨励賞の対象とならない。
2. 論文賞と奨励賞の授与は原則として毎年とし, 受賞論文数は論文賞が1-2編程度, 奨励賞が2編程度とする。
3. 論文賞受賞論文が複数の著者(研究グループ等を含む)により執筆されたものである場合には, 執筆者一同に論文賞を授与する。奨励賞については会員である筆頭著者に授与する。同一論文が, 論文賞と奨励賞の候補となった場合には, 論文賞を優先する。ただし, 奨励賞受賞候補者であることを選考結果報告に記載し, 評議員会で論文賞が授与された際は, 奨励賞の副賞も授与する。また評議員会で論文賞が授与されなかった場合は, 奨励賞候補者として評議員会で審議する。
4. 論文賞選考委員は, 会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の会員のなかから, 評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは, 専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は, 年長順とする。
5. 論文賞選考委員が受賞候補者となった場合には, 賞の選考に関与しないこととする。
6. 論文賞選考委員に欠員が生じた場合は, 次点者を補充する。
7. 論文賞と奨励賞の選考に当たっては, 論文の独創性, 将来の発展性, 総合性や重要な発見などを選考の基準とする。
8. 受賞候補者の推薦書類は, 幹事会が定める期日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。
9. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称, 推薦者名(自薦を含む), 受賞候補者名, 受賞候補論文名(巻号頁を含む)及び推薦理由。
10. 会長は第四紀通信に論文賞と奨励賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
11. 論文賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と受賞理由を発表する。
12. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。
13. 本内規は, 2012年9月1日から施行する。

◆日本第四紀学会 2012 年度総会議事録

日時：2012 年 8 月 21 日（火）11:50～12:40
 場所：立正大学熊谷キャンパス アカデミック
 キューブ A205 教室
 議長：海津正倫会員
 出席正会員数：88 名、委任状 135 通、（名誉会員
 2 名）

出穂行事幹事の司会により、まず大会実行委員長
 の福岡孝昭会員のあいさつが行われた。さらに
 遠藤邦彦会長のあいさつに続いて議長の選出が行
 われ、海津正倫会員が選出された。定足数確認後、
 配布資料に基づき、下記の報告および審議が行わ
 れた。

I. 報告事項

1.2011 年度事業報告

久保幹事長より各事業の報告（本号「2012 年
 度第 1 回評議員会議事録」に掲載）が行われ、ま
 た逝去された会員に対して黙祷がささげられた。

2.2011 年度会計報告・会計監査報告

資料に基づき、池原会計幹事より 2011 年度会
 計決算報告、大場会計監査より会計監査報告が行
 われた。

3.2011 年度各委員会等報告

久保幹事長及び水野庶務幹事より、研究委員会
 報告、学会賞・学術賞受賞者選考報告、論文賞・
 奨励賞受賞者選考報告、名誉会員候補者選考報告、
 教育・アウトリーチ委員会報告が行われた。また

国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会報告と
 して、齋藤委員長より 2015 年名古屋大会に向け
 た進捗報告が行われた。さらに学術会議 INQUA 分
 科会報告として奥村委員長から報告がなされた。

II. 審議事項

1.2012 年度事業計画

久保幹事長より、資料に基づき学会活動方針が
 示され、承認された。

2.2012 年度予算

池原会計幹事より、資料に基づき、2012 年度
 予算案が提示され、承認された。

3. 名誉会員の評議員会出席に関する会則の一部改
 正

名誉会員が評議員会に参加して発言ができるよ
 うに会則を一部改正する提案が幹事会から出され、
 承認された。

4. 名誉会員の決定と役員の補充

評議員会で推薦された 4 名の名誉会員候補者を
 名誉会員とする提案が幹事会から出され、承認さ
 れた。新しい名誉会員は、大場忠道会員、菊地隆
 男会員、成瀬 洋会員、真野勝友会員である（詳
 細は、本号「新名誉会員の紹介」に掲載）。また
 大場会員が名誉会員に決定したことに伴い、2012
 年度の地球化学分野評議員として中村俊夫会員が、
 会計監査として鈴木毅彦会員が新たに就任した。

◆「銚子巡検」のお知らせ（日本第四紀学会後援）

日本地質学会関東支部と関東地質調査業協会共催、日本第四紀学会後援で以下のように銚子周辺の巡検がおこなわれます。

巡検では、銚子周辺にみられる薄衣型礫岩（ペルム紀？）やジュラ紀付加体、白亜紀以降の前弧海盆堆積物や前期中新世の古銅輝石安山岩溶岩、そして鮮新統～更新統の犬吠層群までを観察します。さらに、夜間講演会では、観察事項、昨今の知見、およびそれらに基づく日本列島形成史や関東平野の変動史の解説が案内者によりなされます。最終的に、参加者の皆様には変動帯としての日本列島の鳥瞰的理解を深めていただきたいと思いますと考えております。

開催日時：2012年10月27日（土）～28日（日）、1泊2日

主なルート：1日目 8:30JR 錦糸町駅南口付近発→11:00～16:30 銚子周辺→17:00 宿

2日目 8:00 宿→8:30～15:30 屏風ヶ浦周辺→18:00 錦糸町駅解散

募集対象・募集人数：会員および一般、40名程度

参加費：17,000円（学生は10,000円）

宿泊代（二食＋2日目昼食）および往復貸し切りバス代を含む。初日の昼食は各自弁当持参。

講師：高橋雅紀氏（産総研）、鈴木毅彦氏（首都大学東京）

申し込みの締切日時：10月20日（土）17時

申し込み・問い合わせ：加藤 潔（駒澤大学）kiyoshi.katoh(at)gmail.com

細根清治（株式会社東建ジオテック）s.hosone(at)tokengeotec.co.jp

（地質学会関東支部）<http://kanto.geosociety.jp/>

◆“東海地震” 防災セミナー 2012[第29回]のお知らせ

昭和59年以来、毎年静岡市で開いてきましたが、本年も下記のとおり開催致します。関心をお持ちの方々のご参加を期待します。

日 時：平成24年11月8日（木）13:30～16:00

会 場：静岡商工会議所 静岡事務所5階ホール（JR静岡駅北口西側）

テーマ：東日本大震災に学ぶ

座 長：静岡大学理学部地球科学科 静岡大学防災総合センター 教授 里村 幹夫

1. 東海地震はなぜ予知出来ないのか 東京大学大学院理学系研究科 准教授 井出 哲

2. 東海地震の災害医療 静岡県立総合病院 副院長 安田 清

主 催：東海地震防災研究会

連絡先：〒422-8035 静岡市駿河区宮竹1-9-24 土研究事務所 土 隆一

Tel:054-238-3240 Fax:054-238-3241

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：兵頭政幸（mhyodo(at)kobe-u.ac.jp）宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学 内海域環境教育研究センター 兵頭政幸

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 FAX:078-803-5757

広報委員：糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail: daiyonki(at)shunkosha.com 電話:03-5291-6231 FAX:03-5291-2176